

平成 23 年度大仙市立中学校生徒海外派遣事業

オーストラリア研修 報告書



平成24年1月3日(火)~1月10日(火)

大仙市立中学校生徒海外派遣 様

日程 ; 平成24年1月3日(火) ~ 1月10日(火) 8日間

参加人員: 生徒20名様

日次	月日(曜)	都市	現地時間	交通手段	スケジュール 【宿泊先】	朝食	昼食	夕食
1	1/3 (火)	(集合) 秋田空港 秋田空港発 羽田空港発 成田空港発	14:00 15:20 17:10 20:25	航空機 リムジンバス 航空機	国内線ターミナルビル内1階ファミリーマート前 ANA876で羽田へ 羽田空港着 16:30 成田空港着 18:25 JQ12便にてゴールドコーストへ(所要9:00)	×	×	機内
2	1/4 (水)	ゴールドコースト空港着 ゴールドコースト空港発 ボーデザート	06:25 07:30 09:30 10:00 終日	貸切バス	ゴールドコースト空港到着 入国手続後、ボーデザート地区へ移動。約2時間。 コミュニティーセンター(予定)にて対面式。 ホストファミリー面会后、ファームステイ先へ移動 ホストファミリーと過ごす1日 ファームの仕事と一緒に手伝い、家族と共に過ごしていただきます 【ファームステイ】	機内	ステイ先	ステイ先
3	1/5 (木)	ボーデザート	終日		ホストファミリーと過ごす1日 ファームの仕事と一緒に手伝い、家族と共に過ごしていただきます 【ファームステイ】	ステイ先	ステイ先	ステイ先
4	1/6 (金)	ボーデザート	終日		ホストファミリーと過ごす1日 ファームの仕事と一緒に手伝い、家族と共に過ごしていただきます 【ファームステイ】	ステイ先	ステイ先	ステイ先
5	1/7 (土)	ボーデザート		貸切バス	ファームステイ先を出発 観光=山 ~グリーンマウンテン観光(世界遺産)~ 午前~午後: アルパカ牧場、ツリートップウオーク 野鳥の餌付けなど 午後: カラビアンワイルドパークにて アボリジニーショーの見学 【ゴールドコースト泊】 (スタンダードクラス)	ステイ先	レストラン	レストラン
6	1/8 (日)	ゴールドコースト	08:30	貸切バス	観光=海 ~ゴールドコーストの大自然体感~ クルーズボートでしぶきを感じながら無人島へ。 船中では、名産マッドクラブの仕掛けを引き上げ。 マッドクラブの生態説明。野生のペリカンに餌付け。 無人島上陸後は、釣り餌とり、釣り体験など。 ※船で戻り休日の公園でオージーキッズとの昼食・交流会 【ゴールドコースト泊】 (スタンダードクラス)	ホテル	公園	各自
7	1/9 (月)	ホテル発 ゴールドコースト空港着 ゴールドコースト空港発 成田空港着 成田空港発	08:30 09:00 10:50 18:55 20:30	貸切バス 航空機 航空機 貸切バス	出国手続後、JQ11便にて成田空港へ(所要9:05) 入国手続 貸切バスにて秋田へ	ホテル	機内	機内
8	1/10 (火)	大仙市役所着	07:00		無事到着、お疲れ様でした。	×	(各自)	

平成23年度大仙市中学校生徒海外派遣事業派遣生徒一覽

No.	中学校名	学年	生徒氏名	性別	No.	中学校名	学年	生徒氏名	性別
1	大 曲	2	開田有紗	女	11	平 和	2	齊藤萌々	女
2	大 曲	2	加藤 啓	男	12	平 和	2	菅原未咲	女
3	大 曲	2	佐々木 萌絵	女	13	協 和	2	加藤美帆	女
4	大 曲	2	佐藤理沙	女	14	西仙北東	2	伊藤大河	男
5	大 曲	2	佐藤怜佳	女	15	西仙北東	2	田口咲月	女
6	大 曲	2	鈴木愛理	女	16	南 外	2	鈴木奈津美	女
7	大 曲	2	鈴木瑛亮	男	17	南 外	2	八嶋美咲	女
8	大 曲	2	鈴木志保	女	18	中 仙	2	九嶋朱星	女
9	大 曲	2	高橋 遥	女	19	豊 成	2	井上大和	男
10	大 曲	2	高山舞花	女	20	豊 成	2	山崎 真太郎	男



事前説明会

10月5日(水) PM 6:00~ ・派遣生等紹介 ・教育指導課長より ・パスポート取得、旅行準備について(JTB) ※ <u>海外旅行お伺い書(パスポートコピー貼付け)の提出について</u> 大仙市役所: 申請から取得まで、土・日を除いて9日間かかります。 ※ <u>Homestay Application Form(ホームステイ申込書)の提出について</u> ・今後の予定について(教育研究所)	場所: 大曲図書館3F 視聴覚室
12月21日(水) PM 6:00~ ・ファームステイおよび日程についての最終確認、外貨両替について等(JTB) ・緊急連絡先記入/提出(教育研究所)	場所: 大曲図書館3F 視聴覚室

事前学習会

10月28日(金) 第1回学習会 PM 4:30~6:00 ・CIRによるオーストラリアの文化紹介 ・自主研究テーマの設定 その他 ※海外旅行お伺い書、Homestay Application Form 保険の申込書、外貨の申込書の提出	場所: 大曲図書館3F 視聴覚室
11月25日(金) 第2回学習会 PM 4:30~6:00 ・自主研究テーマの提出(面接により、自主研究テーマを広げる・深める) ・英会話レッスン(自己紹介・飛行機の中で・税関にて・ショッピングしよう・ホテルにて) ・出入国カードの記入について	場所: 大曲図書館3F 視聴覚室
12月27日(火) 第3回学習会(結団式) AM 9:30~11:30 ・ファームステイグループごとの日本文化紹介準備活動 ・作成レポートについて(様式、枚数、締め切りなど) ・報告会について ・結団式	場所: 大曲図書館3F 視聴覚室

オーストラリア海外研修

1月3日(火)~1月10日(火)	場所: オーストラリア(ゴールドコースト)
------------------	-----------------------

報告会・解団式

2月13日(月) 報告会および解団式 PM 3:00~4:30 ・代表生徒感想発表 ・グループ別報告会及び協議	場所: 仙北ふれあい文化センター
---	------------------

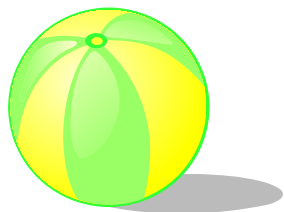
結団式

派遣生徒代表誓いの言葉

私は、この海外派遣事業に参加できると決まった時、喜びでいっぱいでした。なぜなら、私は以前から日本人とだけではなく、人種や環境、見方が違う人達と交流をして、自分自身の視野を広げたいと思っていましたからです。その目的を達成するためにも、自分から積極的に交流し、普段勉強している英語がどのくらい通じ理解できるのかを確かめて来たいと思います。

さらに私は、オーストラリアの良さを知るだけでなく、日本の良さも海外に伝えたいと思っています。私が習っている習字から、日本文化の美しさや日本人の心について発信して来たいです。

出発の日が一日一日と近づいてきました。海外派遣事業の準備をして下さった方々に、常に感謝の気持ちを持ち、この海外派遣を機会に出会った友達と協力しながら、学びや新しい発見がたくさんある、充実した8日間を過ごして来たいと思います。

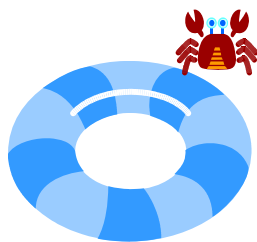


大曲中学校 鈴木愛理

私が今回このオーストラリア研修に参加した理由は、昨年デンマークからホームステイに来た人がきっかけです。その時私は英語を習いたてでコミュニケーションを上手にとることができず、とても悲しい記憶が残っているからです。あの日から一年経った頃ちょうどこの研修のことを知り、参加することに決めました。英語を習い始めて二年経った今、どれだけ海外で自分の英語が通用するのか試してきたいと思っています。

また、オーストラリアに行ったら、広大で美しい土地と海も見に行きたいと思っています。日本とは違う海を見られたらうれしいです。

今回の私の自主研究テーマは「大仙市で農業を盛んにするには？」というテーマです。オーストラリアは新鮮で品質が良いと評価の高い、野菜や果物、肉などが豊富で農業が盛んな所です。気候が似ている温帯気候周辺で多くのことを調べて来たいと思います。そして、よりよい大仙市にしていけるために、この20人の仲間と一緒に研修に臨みたいと思っています。



協和中学校 加藤美帆

H 2 3 年度海外派遣生徒自主研究テーマ一覧

No.	中学校名	学年	生徒氏名	性別	自主研究テーマ
1	大 曲	2	開 田 有 紗	女	ごみを減らし、大仙市をより住みよい街にするためにはどうするべきか？
2	大 曲	2	加 藤 啓	男	緑を増やし自然を守るには、どうしたらよいだろうか？
3	大 曲	2	佐々木 萌絵	女	伝統文化を広めるためにはどうするべきか？
4	大 曲	2	佐 藤 理 沙	女	自然を守っていくにはどうするべきか？
5	大 曲	2	佐 藤 怜 佳	女	大仙市の環境をより良くするためには？
6	大 曲	2	鈴 木 愛 理	女	自然保護のためには、普段の生活からどのように活動していけばいいのか？
7	大 曲	2	鈴 木 瑛 亮	男	自然環境をどのように保護していくことができるか？
8	大 曲	2	鈴 木 志 保	女	少子高齢化社会の中で、私たちはどんな生き方ができるだろうか？
9	大 曲	2	高 橋 遥	女	バリアフリーに対する関心を高めるには？
10	大 曲	2	高 山 舞 花	女	私たちの環境を守るためにはどんな工夫ができるだろうか？
11	平 和	2	芥 藤 萌 々	女	自然環境を生かした生活の工夫がもっとできないだろうか？
12	平 和	2	菅 原 未 咲	女	自然保護につながる衣食住の工夫について。
13	協 和	2	加 藤 美 帆	女	大仙市で農業が盛んになるにはどうすればよいか？
14	西仙北東	2	伊 藤 大 河	男	みんながスポーツを楽しむにはどうすればよいか？
15	西仙北東	2	田 口 咲 月	女	地球温暖化を止めるにはどのようなことができるだろうか？
16	南 外	2	鈴 木 奈 津 美	女	自然環境を今のまま保つためにはどうしたらよいか？
17	南 外	2	八 嶋 美 咲	女	お年寄りに少しでも快適に過ごしてもらうにはどんなことができるだろうか？
18	中 仙	2	九 嶋 朱 星	女	相手に伝わりやすいように話すにはどうするべきか？
19	豊 成	2	井 上 大 和	男	野生動物と人が共存するには？
20	豊 成	2	山 崎 真 太 郎	男	野生動物と人が共存するためにはどうしたらよいか？

事前学習会の様子



「まずは初めて会う他校からの参加者と、早く仲良くなりましょう！」

ちょっと緊張しながらも、積極的にコミュニケーションをとって頑張りました。



レベッカ先生と、オーストラリアの概要について、クイズ形式で学習しました。「やった～！当たった～！」「え～！？そうだったの？」楽しくも真剣です。



初めて見るオーストラリアの紙幣はプラスチック製。「なかなか破れないし、間違っって洗濯しても大丈夫！」とレベッカ先生に聞いて、興味津々です。



ALTの先生方と英会話の練習をしました。とても優しく丁寧に教えてもらい、少し自信ができました。オーストラリアで実際に使ってみるのが楽しみです。



オーストラリア入国の練習です。
税関での荷物検査。中から食べ物が出てきました。
係員に扮したレベッカ先生から、“What’s this?”と尋ねられ、“え～っ、即席みそ汁は何て言ったらいいかな…”
自分の持っている英語力で切り抜ける練習です。



ファームステイごとのグループになり、最後の学習会です。



「どんな家庭にお世話になるのかな？」
「おみやげは何を持って行こうか？」



「どんな日本文化を紹介する？」
皆で楽しい相談です。



オージーキッズとの交流会の内容も、
皆で話し合っ決めました。

結団式の様子



大曲中学校の鈴木さん、協和中学校の加藤さんが、派遣生徒を代表してあいさつをしてくれました。

教育長の前であいさつをするのはとても緊張しますが、研修に臨む決意を堂々と発表しました。

他の派遣生徒も、真剣な面持ちで聞いています。間もなく海外研修に出発するという実感がいよいよ湧いてきました。



教育長の激励を受け、大仙市の中学生を代表して研修して来るという意識も高まります。

頼もしい生徒たちの様子に教育長も期待しています。

Australiaで学んだこと

派遣生番号No.1 大曲中学校 開田 有紗

I はじめに

私は、小学生の頃から言葉について興味があり、国語の漢字の勉強や、総合的な学習の英語の授業が楽しみでした。中学校に入学して英語を学び、授業では外国人留学生の方々と交流する機会がありました。英語で話しかけて相手から答えが返ってきたときは、とても嬉しい気持ちになりました。そして、「もっとたくさんの人と英語で会話をしてみたい。生活の中にとけ込んでいる英語を学んでみたい。」と考え、この研修への参加を希望しました。

また、世界の国々の文化や習慣は本やテレビなどで知る事ができますが、そのような文化に実際に触れる機会はほとんどありません。オーストラリアで、触れたことのない文化や生活を体験して、自分の視野を広げたいという思いもありました。

研修に参加できることが決まってからは期待と不安でいっぱいでしたが、出発した私を待っていたのは最高の8日間でした!

II 研究テーマとその調査

テーマ:ごみを減らし、大仙市をより住みよい街にするためにはどうするべきか?

～設定の理由～

大仙市に限らず、日本では毎日多くのごみが排出されています。しかし、地球温暖化の問題やごみ処理にかかる費用を考えると、私たちはごみを減らしていかなければなりません。私は、オーストラリアのごみについての取り組み方を調べることで、大仙市の取り組みの良いところ、オーストラリアに倣うべきところが分かるのではないかと考え、このテーマを設定しました。

～調べたこと～

私は、自分の生活にも身近な次の4つのことについて調べました。

- ①エコバッグの使用
- ②ごみの分別
- ③製品への工夫
- ④ごみのポイ捨て

①エコバッグの使用

私は買い物へ行くとき、よくエコバッグを使います。また私の家族は、スーパーマーケットへ行くときマイバケットを使い、レジ袋をもらわないようにしています。そこで、オーストラリアではどうなのかを調べました。

ファームステイ先でスーパーマーケットに連れて行ってもらった時、ホストマザーはレジ袋をもらっていました。また、商品は直接カートに入れてレジまで運んでいたため、マイバケットのようなものもありませんでした。買ったものはすべてスーパーでもらえる袋に入れて持ち帰るようです。

さらに、ホストマザーに「エコバッグを使っていますか?」と質問をしました。返ってきた答えは「No」。「手早く処分することができるレジ袋を使っている」と聞く



▲1回の買い物でたくさんのお袋を使いました

ことができました。

私は、エコバッグは世界中で普及してきている物だと思っていたので驚きました。しかし、家からスーパーマーケットまでが遠く、1回の買い物でたくさんの商品を買う人が多いオーストラリアでは、エコバッグがあまり普及していないのも仕方がないことかもしれないと感じました。

②ごみの分別

大仙市では家庭ごみを、「燃やせるごみ、燃やせないごみ、ビン・缶、ペットボトル、古紙」の5種類に分別して定期回収しています。

オーストラリアでは何種類に分別しているのか調べるために、私はホストマザーに「ごみを何種類に分別していますか？」と質問をしました。ホストファミリーの地区では、私たちと同じ、「燃やせるごみ、燃やせないごみ、ビン・缶、ペットボトル、古紙」のほかに“Green waste”と呼ばれる種類のごみもあるそうです。これは主に、木の枝や刈った芝などのごみであると聞き、広大な自然が身近にあるオーストラリアならではの感想を感じました。

③製品への工夫

私の身の回りの製品には、ごみをなるべく増やさないようにしたり、分別しやすいような作りになっていたり、ごみ減量を考えた工夫がされている物があります。洗剤の詰め替えや、ペットボトルのラベルの切り取り線などです。

私は、オーストラリアで水のペットボトルを買いました。そのラベルは、端と端がしっかりと接着されていて、日本の製品のような切り取り線はありませんでした。また、ホストマザーと行った大きなスーパーマーケットでも、日本で売っているような“詰め替え品”は見つけることができませんでした。

製品への工夫は、日本の取り組みの良い点だと思います。

ペットボトルのラベルで比較

日本のラベル（左）と、
オーストラリアのラベル（右）



④ごみのポイ捨て

私の学校では年に1回、学校の近くを流れる川の周りをクリーンアップするボランティア活動があります。私たちは毎年、ビニール袋や空き缶などの、たくさんのごみを拾います。しかしこのような活動をして、ポイ捨てが無くなることはありません。私がいつも歩いている道路にも、たばこの吸い殻などが捨てられています。このようなポイ捨てが多い街では、**住みよい街**とは言えません。オーストラリアではポイ捨てを減らすためにどのような取り組みをしているのかも、調べることにしました。

オーストラリアのコンビニエンスストアのすぐそばで、緑色のゴミ箱を見つけました（写真左上）。街中にはこれと同じ物がたくさんあり、その多さに驚きました。これが、ごみのポイ捨て防止になっていると考えられます。

動物園にも多くのゴミ箱があり、なかには“DON'T WASTE AUSTRALIA”（オーストラリアを荒らさないで）と書かれた物もありました（写真右下）。

日本では、街中にゴミ箱を置いたり、ポイ捨てを注意するような貼り紙を貼ったりすることは、あまりありません。このことから、オーストラリアではポイ



捨てに対する意識が高いことが分かります。

～テーマのまとめ～

今回の調査では、ごみ減量についてオーストラリアと日本を比較し、いろいろなことを発見できました。

まず、日本や大仙市の取り組みの良い点です。買い物の時に使うエコバッグやマイバスケット、製品への工夫やリサイクル、これらは、これからも続けていくべきです。

次に、オーストラリアに倣うべき点です。ポイ捨てを減らすための取り組みはオーストラリアのほうが進んでいました。街中へのゴミ箱の設置や、ポイ捨て禁止を呼びかける貼り紙などです。これらの取り組みを見習うことでポイ捨てが少なくなれば、大仙市がより住みよい街になると思います。

また、ごみを減らすために自分ができることがたくさんある、と改めて気づかされました。普段からしているエコバッグの利用やリサイクルに加え、ポイ捨てしないことへの意識をもっと高めていきたいと思います。さらに、周りの人にオーストラリアのごみに対する取り組みや、身近にできることを発信し、ごみ減量への意識を高め、行動につなげてもらいたいとも考えています。大仙市をよりよい街にしようと考え、行動する人が増えれば、大仙市はもっと良い街になると思います。

III たくさんの体験

オーストラリアでは、日本ではできない体験をし、自分の知らない異文化に触れることができました。

～ファームステイ～

私がお世話になったのは、ホストマザーのKimiさんです。家まで移動する車の中、明るく話しかけてくれ、緊張もほぐれました。

家で待っていたのはたくさんの動物！猫が5匹、犬が2匹です。最初は犬が少し怖かったけれど、とても人懐こくてすぐに仲良くなることができました。さらに敷地内には、多くの牛と馬が放されていました。敷地は、車がなければ移動することができない程の広さで、驚きました。広大な土地を持つ国だからこその広さだと思います。

車での移動中に、野生のカンガルーを見たことも印象に残っています。写真を撮れなかったのが残念ですが、初めてカンガルーを見つけたときはとても感動しました。

家の周りの柵を補強したり、馬のエサを運んだりといった手伝いもしました。家庭菜園ではトマトや葉野菜を収穫する手伝いをしました。トゲのある草が生えていて、思っていたよりも大変な作業でした。

また、家の敷地内で4WD車に乗せてもらいました。日本では、屋敷の中を車で走りまわるようなことはめったにないので、忘れられない思い出になりました。

さらに私は、朝の10時頃におやつを食べることに驚きました。家で作ったクッキーやパウンドケーキ、スコーンなどを食べるのです。スーパーには製菓用の粉類がたくさんあり、ここでもオーストラリアの生活文化を感じました。

私たちは、日本文化の紹介をするために折り紙や扇子やかば細工のスプーン、手ぬぐいやお守りなどをおみやげとして持って行きました。おみやげの説明を英語でするのが難しかったですが、喜んでくれました。2日目には、昼ご飯として“お好み焼き”を作ることにしました。しかし、材料である豚肉とキャベツがホストファミリーの家にはありませんでした。そこで、豚肉の代わりにベーコンを、キャベツの代わりに家庭菜園で収穫した「スピニッシュ」と呼ばれている葉野菜を使って作りました。いつもは使わない材料なので味が不安でしたが、おいしく作ることができました。ホストマザーも、おいしかったと言ってくれて嬉しかったです。



▲ホストマザーにも好評でした！

ステイ先ではホストマザーにたくさんお世話になりました。そしてファームステイの3日

間は、私に驚きと楽しさと一生の思い出をくれました。いつかまたオーストラリアへ行き、Kimiさんと動物たちに会いたいです。

～グリーンマウンテンとゴールドコースト～



▲大きな板根です

世界遺産であるグリーンマウンテンでは、オーストラリアの広大な自然に触れることができました。森の中はどこを見回しても大木があります。中でも私は、木の板根の迫力がすごいと思いました（写真左）。大きな木を支えるために、根が板状になって地表に出ているのです。

その後に行った動物園では、コアラやワニを見ることができました。たくさんのワラビーがいる広場もあり、ワラビーは人に慣れているのか、触っても全く動じませんでした。ワラビーの毛は思っていたよりも柔らかく、驚きました。園内ではアボリジニショーも見学しました。

ゴールドコーストの海は、見たことがないほど青く澄んだ海でした。クルーズボートでは、マッドクラブと呼ばれる大きなカニの引き上げをしたり、ペリカンに餌付けをしたりしました。マッドクラブは、持ち上げるとずっしりと重かったです。真っ白なビーチでの海水浴も、楽しい思い出となりました。



オーストラリアには自然があふれていることを、体験を通して知ることができました。これからも地球環境を考えて生活し、この美しい自然を守っていきたいと思います。

▲美しい海でした

IV 研修を終えて

この研修で私は、今まで知らなかったオーストラリアの生活・文化を知り、体験することができました。そして、たくさんの思い出を作り、多くのことを学びました。

まず、会話・コミュニケーションをするときに大切な事です。相手に伝えたいと思っている事は、口に出さないと伝わりません。うまく言うことができなくても、「相手に伝えたい!」という気持ちを持つことが大切でした。そして、この気持ちを持って自分から積極的に話をすれば、それは必ず相手に伝わると学ぶことができました。これから誰かと英語で話すときは、自分から積極的に、間違いをおそれずに話しかけたいと思います。

会話の中で、英語を聞き取ることが自分の課題であることも分かりました。自分から話すことができても、相手からの返答が聞き取れずに困ったことがありました。書く・話す練習とともに、聞く練習ももっとしていかなければと思いました。

また、ごみ問題について調査して、大仙市をよりよい街にするためには一人一人が行動を起こしていくことが大切だと分かりました。自分が行動を起こすことはもちろん、オーストラリアのごみへの取り組みと日本・大仙市のごみへの取り組み、両方の良いところを周りの人に伝え、行動を起こしてもらいたいと考えています。

私は、たくさんの人に支えられて、この海外派遣事業を無事に終えることができました。この研修に参加できるチャンスくれた家族、準備や現地でお世話になった人達に感謝を伝えたいです。本当にありがとうございました。

今回学んだ事は、これからの生活や進路決定に生かしていきたいと思います。そして、もっと英語を勉強し、上達したらまたオーストラリアを訪れたいです。

オーストラリアの大自然と 大仙市の自然環境

No.2 大曲中学校 加藤啓

1. はじめに

今回、この派遣事業への参加が決まった時は、楽しい気持ちもあり、また、不安も少しありました。一緒に行く仲間と、うまく打ち解けられるかという心配もあり、海外で自分の英語が通じるかも分かりません。でも、学習会を重ねるにつれて、仲間とも仲良くなり、先生たちのおかげで英語にも自信をもてるようになりました。そうこうしているうちに、とうとうオーストラリアへの、出発の日が来ました。

オーストラリアへは、遊びに行くものではありません。あくまでも、学ぶため。もちろん、自分で「課題」を設定しました。僕の課題は、ずばり「大仙市に緑を増やすには、どうしたらよいだろうか。」です。なぜこのような課題を設定したかと言うと、僕にとってオーストラリアは、「豊かな大自然の国」というイメージが強く、また、大仙市には緑が少ないと思っていたからです。

出発当日、秋田空港に集まった 20 名は、昼の便で羽田空港に着き、バスで成田空港へ移動して、そこから、オーストラリアへ向けて旅立ちました。何もかもが初めてで、特に、入国審査はとても緊張しました。日本を出て海外へ行くなんて、夢のようでした。

2. 調査

課題の自然について調べてきました。

ゴールドコースト空港から一歩足を踏み出すと、東京とは、真逆の世界。木がたくさんありとても乾燥しています。バスで移動中も、まわりは森と農場と家。さらに動物は、視界に入ってこない時はないくらいたくさんいました。とにかく、日本とはくらべものにならないくらい緑が多く、驚きました。その違いを作っている要因は、やはり、日本で行われている木々の伐採など、資源の無駄使いにあると思います。緑を増やす、それ以前の問題です。改善するためには、これらの問題を解決し、植林などをしていかなければなりません。これは、大仙市だけでなく、日本全体の問題です。まずは、個人から変わらなければならないと、強く思いました。そして、みんなで協力して環境を守っていくことが大切だと感じました。

3. オーストラリアに到着、そしてファームステイへ

①念願の、オーストラリアへ・・・

9時間かけてやっとの思いで着いた、真夏のオーストラリア。飛行機を出た瞬間、たいへんな暑さで、周りに木々もたくさんあり、日本とは大違い。オーストラリアに着いたという実感がわきました。そして次は、入国審査。緊張しながらも、終わるとホッとひと安心。入国審査官の方が優しく接してくれて、うれしかったです。

バスに乗ると、さっそく注意されたのが、「シートベルト」。意外にも、オーストラリアは交通ルールが厳しく、原則着用しなければならないそうです。日本との大きな違いだと思います。

バスで着いたのは、ファームステイ先の方との待ち合わせ場所。不安と楽しみでいっぱいでした。



迎えにはホストファーザーが来てくれたのですが、とても優しくそうな方で、安心しました。車に乗り、ステイ先へ向かう30分ほどの道のりでは、自己紹介に始まり、会話がはずんでいきました。会話に夢中になりすぎて、気がつけばステイ先に到着していました。到着すると、ホストマザーと、犬のテラが迎えてくれました。とてもフレンドリーな方々で、すぐに仲良くなりました。そしてすかさずモーニングティーが出てきて、さすが海外と思いながら、ファームステイの3日間が始まりました。

②ファームステイ1日目

1日目の午前中は、モーニングティーを楽しみながら、自己紹介をし、犬のテラと遊び、農場についてお話を聞きました。僕たちがステイした農場は12エーカーの大きさがあり、牛5頭、アルパカ2頭、にわとりが40羽くらいいる広大な農場で、敷地内には、なんと池までありました。午後は、木を捨てる作業をした後、釣りをしました。残念ながら、1匹も釣れませんでした。初めての体験で、楽しかったです。



③ファームステイ 2日目

朝4時に、にわたりの鳴き声で目が覚めた僕は、外へ出て農場内を散歩しました。あたりはもう明るくなっていました。

朝ごはんのあと、にわとり小屋を作る作業をしました。小屋の土台と壁の一部を作る仕事でしたが、モノを作ることが大好きな僕にとっては、とても楽しい時間でした。

午後は、コアラを見に行きました。初めて見たので、興奮しました。

そのあとは、ホストマザーとお買いもの。いろいろな店を回れて、楽しく、英語で買い物もできたので、良い経験になりました。その後はまた、小屋作りの続きをしました。



④ファームステイ 3日目

3日目は海へ行きました。とても涼しく、オーストラリアの海を満喫しました。帰ってからは、小屋作りもいよいよ完成へ向けて、ラストスパートです。完成した小屋は、ホストファミリーみんなが喜んでくれたので、ホッとしました。

⑤お別れのとき・・・

ついにお別れのときが来てしまいました。3日間がとても短く感じ、別れたくなくて、泣いてしまいそうでした。

僕はこのとき、このオーストラリアでの体験を日本に帰って必ず役立てようと思いました。

⑥ファームステイを終えて

充実した3日間は、貴重な体験になりました。

これらの体験を、これからの生活で、しっかりと生かしていこうと思います。

4. 世界遺産と無人島へ

5日目と6日目には、世界遺産と無人島へ行きました。世界遺産のグリーンマウンテンは自然あふれるきれいなところで、空気が新鮮で、ジャングルのような木々が、たくさんありました。生まれて初めて見る世界遺産だったので、興奮しました。

無人島では、海がすごく透き通っていて、驚きました。船で行きましたが、船からも透き通っているのが分かるくらいで、「こんなところに、住んでみたいなあ」と、考えてしまいました。

5. オージーキッズとの交流

6日目の交流は、とてもわくわくしていましたが、始まってみるとなんと、男の子が一人もいませんでした。何をしたら良いか迷っていると、ある男性の方に、クリケットに誘われました。オーストラリアのテレビで見た時からやってみたいと思っていたので、とてもラッキーでした。さらに、オーストラリアのダンスと一緒に踊ったり、「世界に一つだけの花」を歌って聞かせたりして、いい思い出になりました。

6. まとめ

日本と違うことが、たくさんあって、素晴らしいものばかりでした。

豊富な植物や動物、大自然にかこまれた中で生活できたのは、良い経験です。夢のような1週間でした。この研修を通して、オーストラリアの自然環境保護の取り組みをヒントに、大仙市の自然を大事にしていくために自分は何ができるだろうかということをおぼろげに考えるチャンスにもなりました。水などの資源を大事に使っているオーストラリアの人々を見て、自分にもできそうなことがつかめたような気がします。「大仙市の緑を増やす」ことにつながりそうなことは、どんな小さいことでも実行していきたいと思えます。

また、英語に対する興味がさらに深まりました。将来は、海外で働きたいと思っていますので、しっかりと勉強して、夢に向かって突き進んでいこうと思っています。



伝統文化を広めるためにはどうするべきか？

No.3 大曲中学校 佐々木萌絵

I はじめに

私は、夢が叶って「海外に行くこと」ができました。今まで、海外について、テレビや新聞で見聞きするだけだったのですが、今回、大仙市立中学校生徒海外派遣事業に参加し、オーストラリアに行くことで、文化や自然を直に感じ、触れることができました。

私がこの派遣事業に応募した理由は、自分の学んだ英語力を試し、海外に行くことによって自らの視野を広げ、日本を客観的に見てみたいと思ったからです。主観的視点を、日本から海外・オーストラリアに変えて見ることで、日本の良さを実感できると思いました。

派遣事業に参加できることが決まり、心から嬉しいと感じました。そして1月3日。期待と不安が入り混じる中、日本を出国しました。



II 自主研究テーマ設定の理由

今私が住んでいる大仙市には、昔から伝承されている文化が多く存在しています。例えば、食べ物ではきりたんぽ、いぶりがっこ、納豆汁などです。また、伝統芸能では「秋田おぼこ節」「ドンパン節」などの民謡が挙げられます。

私が習っている日本文化は日本舞踊と習字です。小学校でも中学校でも、習字は、国語の書写の時間に教わるので、ほとんどの人が体験します。日本舞踊は全国に120の流派があり、6000名の師範の方が教えている現状です。しかし、日本の文化に直に触れ、伝承している人は全体の中ではごくわずかであるのが現実で、大仙市民の関心も高いとは言えません。

日本文化に対する人々の関心を高め、広めていくにはどうすればいいのだろうか。オーストラリアの歴史ある文化からそこを学びたいと思い、『伝統文化を広めるためにはどうするべきか？』というテーマを設定しました。

III 調べた内容

❁ オーストラリアの文化

オーストラリアの大自然に根づき、今も受け継がれている文化はたくさんあります。移民によって形成されたマルチカルチャーと、先住民によるアボリジニ文化の融合は、多民族・

多文化国家としてのオーストラリアを作り出していると言えるでしょう。

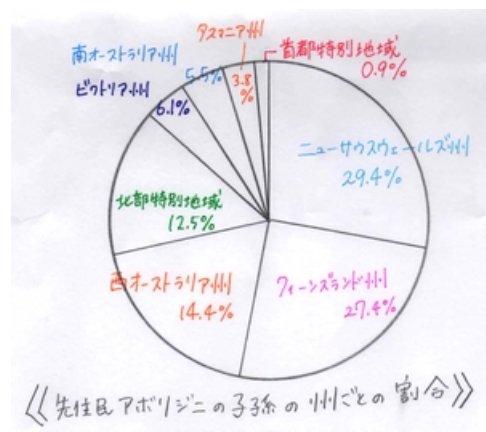
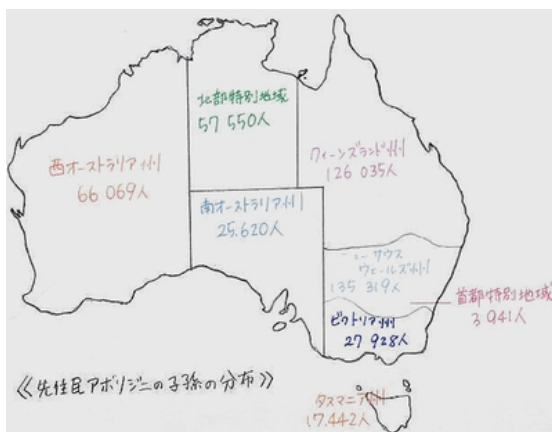
実際オーストラリアに行ってみて、人々のフレンドリーな気質は、まさに多民族・多文化国家を象徴するものであると、実感しました。

カランビンワイルドパークではアボリジニの方による、アボリジニダンスを見ました。その独特な音楽と踊りは観光客を惹きつけ、会場は人で一杯になりました。その先住民アボリジニの歴史から、文化の伝承がどのように行われてきたのかを学びたいと思います。

《 オーストラリアの先住民アボリジニについて 》

約 6 万年前からオーストラリア大陸に居住していたといわれる先住民アボリジニは、氷河期時代に東南アジアから移住してきたとされています。全部で 400 から 800 種類の種族が共存し、種族によって異なった言葉を話し、狩猟採集・漁を行う自然と共生する生活を営んできました。自然との共存を図って、様々な知恵や生活習慣を生み出していった先住民アボリジニは、独自の世界観を持ち、今でも文化を伝承し続けています。

現在、先住民アボリジニの純血をひいている人はもう居ません。その子孫にあたる人々は第 1 にニューサウスウェールズ州、第 2 にクィーンズランド州…というように東海岸側に多く暮らしています。



《 アボリジニの歌と踊りについて 》

アボリジニの歌と踊りに欠かせないのがディジュリドゥという、木を食べてしまうシロアリを利用して、空洞化されたユーカリの木から作った 2mほどの長い筒状の笛で、アボリジニ独特の民族楽器です。

とても独特な動きで、カンガルーダンスや、神に祈る為の踊りを、ディジュリドゥの音楽に合わせて踊ります。



《 伝承方法について 》



現在アボリジニダンスの多くは、テーマパークや道端など、人が多く集まる場所で見ることが出来ます。先に書いた通り現在、アボリジニの純血をひいている人はもういませんが、その子孫が、この伝統を伝え、残そうと、働きかけているのです。

オーストラリアの文化伝承に対する関心も、アボリジニの子孫によって高まっている傾向で、自分の住んでいる国の文化や特徴に触れることは、オーストラリアの人にとっても、大変価値のある

ものだということが見えてきました。

《 マルチカルチャーについて 》

18世紀のころから移民を受け入れ、多民族・多文化国家を形成してきたオーストラリアは、人々の性格も寛大で、うちとけやすい気質です。私がお世話になったファームステイ先でも、ホストファミリーが、紹介した習字や折り紙と一緒に楽しんでくれるなど、快く日本の文化を受け入れてくれました。

自分の国の文化を大切にし、また、他国の文化を尊重するのがオーストラリアであり、その文化なのではないかと思いました。

❁ まとめ

オーストラリアでは、伝統をこれから先も継承していくために、地元の人が協力し合い、地元から伝統芸能を守っていくという意志を根づかせていました。また、それにより人々の関心度も高まり、大切にされているのだと思います。今もいろいろな場所で歌われ、踊られ、観賞されているのは、現地の人などたくさんの人々の意志の強さの結果だと思いました。

大仙市でも、このような活動が行われているのは聞いていますが、参加する人、観賞する人も少ないそうです。これはつまり、市民の皆さんの伝統文化を守り、伝えていくという意識は低いと言えるのではないのでしょうか。食べ物も伝統芸能も、大仙市の宝物のような文化を今ここで伝え残す事ができなければ、これから先、文化として根づいていきません。私達市民一人一人が文化に対する理解を深め、これを伝えていかなければならないという意志を持ち、行動することが大切なのだと思います。



IV エピソード

❁ ファームステイ先で

私はオーストラリアでの 3 日間、ボーデザートから車で約 1 時間のマイケルさんとローリーさんのお宅でファームステイを体験してきました。マイケルさんとローリーさんは二人暮らしで、愛犬が 3 匹。広大な敷地には、牛、馬、野菜の採れる畑、貯水タンクが 6 個に、家が三つありました！少し離れると、家がどこにあるのかわからなくなってしまふほどの土地の広さに驚きました。



スクーター：女の子：走るのが速い！



1 日目はボーデザートで食材の買い物をしました。マイケルさんのお宅では、飼っている牛を食糧としているので、買い物は 3, 4 週間に一回ほどだそうです。スーパーマーケットのカートは日本のものより倍ほども大きく買い物も大量でした。昼食はレタスとハムとチーズのサンドウィッチ。食後の農場の散策では、マイケルさんの 4WD 車の後ろに乗せてもらいました。車からの眺めはとてもきれいでした。

2 日目、朝食はシリアルを食べました。そしてグループのみんなで、日本の文化である習字を二人の前で披露しました。二人も筆を持ち、ひらがなで『まいける』『ろーりー』と書いてくれました。また、3 日目も日本文化の折り紙をやりました。英語で説明するのはとても難しかったのですが、うなずいて「I see.」と言ってくれた時、理解してくれたのだと思うと嬉しくてたまりませんでした。また、私が踊った日本舞踊も喜んでくれました。体験して、日本文化について知ろうとしてくれたマイケルさん、ローリーさんの国境や人種を越えた人間の温かさに感動しました。



みんなで鶴をおりました。



野生のカンガルー

4 日目、お世話になった二人との別れの時間になってしまいました。最後まで笑顔で送ってくれて、別れるのがとても残念に思いました。

初めての海外に胸を高鳴らせていた私ですが、実は外国人に通じる英語が話せるのだろうかという不安を抱えていました。緊張して、うまく口から出ない英語をカバーするために、一生懸命体を使って伝えようとしたりもしました。文法が間違っていたり、片言の英語で、ホストファミリーの二人には理解しづらかったかもしれませんが、積極的に話しかけ会話ができるようになって初めて、言葉が通じあう事が、こんなにも嬉しいことなのだと、実感しました。

私にとって、マイケルさんとローリーさんはもう一つの家族です。「オーストラリアに来る機会があったら、是非寄って！」と言ってくれて、心の絆を感じました。感謝の気持ちでいっぱいです。私の将来の夢である、教師になる事を実現させることができれば、またオーストラリア、そしてボーデザートに行きたいと思います。

❁ グリーンマウンテン、ゴールドコースト市街

世界自然遺産に指定されているグリーンマウンテンでは、オーストラリアの雄大な自然に触れる事ができました。

移動のため通った峠には黒く、焼け焦げた跡があり、それは以前山火事があったことを証明しています。非常に乾燥した地なので、山火事はめずらしいことではないそうです。

コアラの抱っこ体験は、約 AU \$ 20(約 1800 円)の料金でできます。このお金は、地元の動物病院への寄付、そしてコアラの保護支援のために使われるそうです。抱いてみると、見た目よりもずっしりと重く、掴まれた腕に爪が食い込んで痛かったです…。

さらにアルパカ牧場、野鳥の餌付など、オーストラリアならではの体験ができ、とても楽しく充実した5日間でした。



V 海外派遣事業を終えて

日本にはない文化、日本ではできない経験。オーストラリアでは、心に残る体験をたくさんしてきました。



オーストラリアの良さは、自然があり、文化があり、多民族・多文化国家を象徴するフレンドリーで寛容な、どんなことでも受け入れてくれるところではないかと思います。

また、これを機に、国土の面積は小さいけれども、四季折々の美しさと誠実な人柄や優しさ、そして

妥協を見せない強さなど、この5日間で日本の良さも改めて感じる事ができました。



VI 最後に

この派遣事業で学んだこと、それは挑戦することの大切さだと思います。親の元を離れて、力を借りずに過ごすことや、ファームステイ先でホストファミリーや友達と過ごすことは、積極的に挑戦したからこそ、できた事なのだと思います。何ごとも最後まで諦めず、挑戦していく姿勢を持って今後も頑張っていきたいと思います。



そして異文化との交流は、相手との理解を深めるだけではなく、母国の良さを実感させてくれるということを、派遣生としてみんなに伝えていきたいです。

また、この海外派遣事業に参加するにあたって協力してくれた家族、サポートして下さった先生方や大仙市教育委員会、

そして JTB の皆様に感謝の気持ちを忘れずに、過ごしていきたいと思っています。これからの日々を、将来の夢に向かって頑張っていきます。

オーストラリアレポート

No.4 大曲中学校 佐藤 理沙

I はじめに

私がこの研修を知ったのは、中学一年生の冬でした。先輩方がオーストラリアに行くという話を聞いて、「格好良いなあ・・・来年は自分も行ってみたい！」と思い、今回の研修に応募することを決めました。普段はなかなか外国人と話す機会がないため、**自分の英語が本当に通じるだろうかという不安**と、**伝えてみたいという希望**を抱きながら、私はオーストラリアに旅立ちました。

II テーマ設定の理由

《テーマ》

自然を守っていくには、どうするべきか。

近年、地球温暖化や環境破壊により、日本を含む多くの国で古来の自然が失われつつあります。そこで、今回自然豊かなオーストラリアでは、**自然を守るためにどんな工夫をしているのか**を調べてみたいと思い、このテーマを設定しました。

III 調べた内容

① ごみを減らすための取り組みについて

私が泊まったファームステイ先では、**残飯や家畜のフンで肥料を作り、それを農家の方に売る**、という取り組みをしていました。そのため、ゴミは年にたった三回しか出さないのだそうです。広い家にもかかわらず、**ゴミ箱は一つしかなくて戸惑い**ましたが、ゴミを少なくしようという気持ちが表れているのではないかと思います。

また、最後の日の晩御飯には、それまでの食事で余ったステーキやソーセージなどがいったビーフシチューが出されました。とてもおいしく、さらに残飯を増やさない工夫がされている料理だと思いました。



② 植物を守るための取り組みについて

オーストラリアでは入国検査がとても厳しくて、特に**種などが含まれている食べ物**は絶対に持ち込めないようになっていました。外来植物が入ってきて生態系がくずれ、オーストラリア独自の古来の植物が絶滅してしまうのを防ぐためなのだそうです。

また、**木を守り育て、切らないようにする工夫や、汚れた水を川に流さず、地面にしみこませてろ過する**などの工夫をしているのだと、ホストファミリーのお2人に教えていただきました。

このように、自然を守る独自の工夫をしっかりとっているから、オーストラリアは自然豊かな国なのだと思います。

③ 節水のための取り組みについて

オーストラリアは、乾燥地帯が多く、水資源が大変貴重な国でした。そのため、シャワーの時間も3、4分と大変短く、水の貴重さを痛感しました。普段の私はシャワーにかなり時間がかかっていたので、オーストラリアに行つてすぐの頃は大変でしたが、最終日には慣れてきて、時間を減らすことができました。この工夫は自分の家でもできると思つたので、髪を洗っているときにはシャワーを止めるなどの工夫を続けていきたいです。

また、私たちは食後のお手伝いとしてお皿洗いをしたのですが、その際も、台所のシンクに水と洗剤を入れて、その中でお皿を洗うという、少ない水量でできるやり方で洗っていて、水を流しっぱなしにしたまま洗う日本とは違い、ここにも節水の工夫がされていると思つました。



IV エピソード

《ファームステイ先にて》

私のファームステイ先は、John さん、Lise さんのお宅でした。そこには、テディという犬と、10頭もの馬がいました。その中には、私たちがお宅にお邪魔した日に生まれたポピーという子馬もいました。もうしっかり自分ひとりで歩けるようになっていたので、『この子は12時間前に生まれたんだよ。』と、John さんに教えられたときは、本当に驚きました。

John さんはいつも笑顔で陽気な方でした。私たちによく『これは日本語でなんていうの?』と尋ねてくださったので、会話が弾みました。

Lise さんはとても優しく、いつも私たちのことを考えてくださっていました。Lise さんの名前は『リサ』と読み、私の名前と同じだったので、John さんはよく私を『little Risa』と呼んでくださいました。

Lise さんは飼っている馬をとっても可愛がっていて、私たちに、『この子たちは、私たちのペットなのよ』と笑顔でおっしゃっていました。Lise さんのつくるケーキは絶品で、アフタヌーンティーの時間にはいつも出してくださって本当においしかったです!

そんなお二人にはお友達がたくさんいて、ファームステイ中だけでも、たくさんの方が遊びにいらっしゃいました。どの方も私たちに明るく、優しく接して下さって、本当に嬉しかったです。

ホームステイ3日目には皆で町までピクニックに行きました。その道中でも John さん Lise さんはたくさんのお友達と会われていて、とても社交的な方々だと思つました。なにか困ったことがあったら助け合うというご近所付き合いのよさが印象的でした。





ステイ中の食事は、朝はシリアルにトーストの組み合わせ、昼はサンドイッチやチキンなどの組み合わせが多かったです。アフタヌーンティーには、Liseさん手作りのケーキや、ポテトチップス、クッキーなどをいただきました。夕食では、オープン焼きや、ステーキ、ビーフシチューなどを出していただきました。どの食事もとてもおいしかったのですが、やはり量が多く、普段よく食べる方だといわれる私でも、多すぎると感じました。私はナイフやフォークに慣れてい

なくて、初めのころは食べるのにも一苦労だったのですが、Liseさんが優しく、分かりやすく教えてくださったので、なんとか食べられるようになりました。

お別れのときにLiseさんが私たちを抱きしめて、『I love you.』と言ってくれたときは本当に嬉しくて、思わず涙がこぼれそうでした。この有意義な時間を私は一生忘れません。

《オーストラリアの自然》

其の巻 グリーンマウンテンにて

5日目、私たちは、グリーンマウンテンという世界遺産の観光に行きました。グリーンマウンテンでは、オーストラリア特有の自然をたくさん見ることができました。

初めに、私たちは、野鳥への餌付けをしました。野鳥といっても、日本のような、茶色や黒や白といった地味な色の鳥ではなく、赤や黄色、青、緑とカラフルな鳥ばかりで、とても綺麗でした。餌をもっていると皆寄ってきて、頭や手にたくさん止まって驚きました。



次に、私たちはツリートップウォークに行きました。木がたくさん生い茂っていて、森に入る前は明るかったのに、森に入ると、日光が葉で遮られて届かなくなり、とても暗くなりました。それは、生存競争の過酷さも意味しています。どの植物も日光が必要ですから上へ上へと伸びようとしていきます。しかし、種が落ちたところに大きな木が生えていたりすると、その木に日光が遮られてしまいます。それでも、わずかに漏れる日光を必死に浴びて、生き残ろうとします。グリーンマウンテンは世界遺産なので、倒れてしまった木もそのままにしてありました。その倒れてしまった木が生えていたところはその木が浴びていた分の日光が森の下の方まで届いていました。すると、その近辺だけ、背の低い植物がたくさん生えてきていました。しかし、この日光も数十年先には、また新しい大きな木に遮られ、下の方には届かなくなるのだそうです。

そんな生存競争の中で特に印象的だったのは、やはり『**絞め殺しの木**』です。これは、他の木に絡みついで、絞め殺してしまうという木です。なぜそのようなことをするのかというと、それは勿論『生きるため』です。絞め殺しの木の種は、動物などに運



ばれて、ほとんどが木の上に落ちます。しかし、木の上には、水も栄養もありません。そこで、水や栄養を供給してくれる土を探すため、根を下ろしていくのだそうです。そして、根が土につくと、『絞め殺しの木』はどんどん太くなっていきます。すると、絡みつかれた木は、幹も枝葉もこの『絞め殺しの木』に覆われてしまうので、日光を浴びることができなくなり、枯れてしまいます。絞め殺しの木に絡みつかれている木を見ると、中が腐って空洞になってしまっていて、**大自然の生存競争の厳しさ**を目の当たりにしました。

其の貳 カランビン自然動物保護園

その後、私たちは、カランビン自然動物保護園に行きました。そこには、**オーストラリア特有の動物**がたくさんいました。その中には、コアラを抱っこして、写真を撮ることができる有料サービスがありました。写真代金は、コアラ保護のために使われるのだそうです。抱いてみると爪が鋭くて、少し痛かったです。必死にしがみついできて本当に可愛かったです。ガイドの方も、『この子はコアラのなかでもかなり可愛い子だよ』とおっしゃっていました。



また、私たちは、そこでカンガルーにも触ってきました。私は、まさかカンガルーに自由に触ることができるとは思ってもみなかったので、とても嬉しかったです。子供をお腹の袋の中に入れて

に入れているカンガルーもいて、とても面白かったです。袋の中に入っている子供を触ろうとすると、親カンガルーが怒ってしまうという話を聞いて、**自分の子供を大切に思っている**のが、伝わってきました。

その他にも、迫力ある**原住民アボリジニのショー**や、カンガルーの原型といわれている、木の上に住む、とても珍しい『**キノボリカンガルー**』を見たりと、たくさんの貴重な経験をさせていただきました。



其の参 クルーズボートで無人島へ

6日目、私たちは、クルーズボートに乗りました。船内では、名産の**マッドクラブ**の仕掛けを引き上げました。マッドクラブは、とても大きな鋏を持つ蟹で、迫力がありません。そのマッドクラブも、小さいものや雌はとってはいけないなどの、たくさんの決まりがあって、**しっかり動物を守っている**のだなと思いました。

また、無人島では**ヤビーという小さなエビ**を獲りました。ヤビーを獲る専用の道具があって、筒の部分に砂を差込み、ピストンを引っ張って砂を掻き出して、その中にヤビーがないかを探すというものなのですが、砂に穴が開いているところ、特に別の穴から砂を掻き出しているときに泡が出ているところを狙うと、面白いほど獲れました。

その後、またクルーズボートに戻って、獲ったヤビーを餌にして、魚釣りをしました。残念ながら魚は一匹も釣れませんでした。雰囲気を楽しむだけで、とても楽しかったです。

《オージーキッズとの交流》

その後、私たちは**オージーキッズとの交流会**として、皆でバーベキューをしました。たくさんのオージーキッズが来ていて、私は9歳のエミリーちゃんと8歳のアメリカちゃんと一緒に食事をしました。中に、背の高い大人っぽい女性がいて、年齢を聞いたら同い年で、とても驚きました。そのあと、皆で『**だるまさんがころんだ**』で遊んだり、**オーストラリアの踊り**もたくさん教えていただいたりと、**楽しい時間**をすごすことができました。



V 海外研修を終えて

私は、今回の海外研修でとても貴重な経験をたくさんさせていただきました。出発前は不安で仕方がなかったのに、楽しいことばかりで、**あっという間に時間が過ぎていきました**。

初めての外国、果たして自分の英語が本当に通じるのだろうか・・・と緊張していた私も、**伝えてみたい、頑張ってみよう**と思うことができるようになりました。初めて自分の英語が通じて、ホストマザーの Lise さんになつこりと微笑んでいただいた時の、**あの喜びは一生忘れることができない**でしょう。その喜びを糧にして、これからも英語を勉強していつの日か、しっかり英語を話せるようになったら、またオーストラリアに行って、**今度は自分から話しかけたり、Lise さんになつこりと微笑んで会話がしたい**と思いました。

また、オーストラリアの大自然を肌で感じることで、**環境問題と向かい合う機会**を得ることもできました。深刻な水不足などの問題は、**個人個人が水を大切にすること**で軽減できるのではないかと、思いました。まずは、身近なところから、**水を出しっぱなしにしない**などの工夫を日本でも続けていきたいと思えます。これからは、今回の経験を生かして、さらに**積極的にエコ活動に取り組んでいきたい**と思えました。

本当に素晴らしい体験をさせていただきました。この研修のことは一生忘れません。このような機会を与えてくださった、大仙市教育委員会の皆様、学校の先生方、家族、そしてオーストラリアで出会ったたくさんの方々に対する**感謝の気持ち**でいっぱいです。**本当にありがとうございました**。

大仙市の環境をより良くするためには？

《海外派遣に参加して》

No.5 大曲中学校 佐藤 怜佳

I はじめに

私の学校の英語の授業では、教科書を使った学習だけではなく、国際教養大学の学生さんとの交流や、ALT の先生と実際に英会話をして英語を学習しています。授業中の英会話は簡単な会話だけですが、実際に外国の英会話はどんな感じなのだろうか、自分の英語はどこまで通じるのだろうか、機会があれば試してみたいと思っていました。そんな時、この海外派遣事業があることを知りました。親元を離れて、海外で過ごすことには不安もありましたが、いい機会だと思い、申し込むことを決めました。

学習会では、オーストラリアがどんな国なのかを知ることができました。学習会を通して、オーストラリアには緑豊かな大自然があり、とても環境がよいということを知りました。そしてオーストラリアの人々は環境をよくするためのいろいろな工夫をしているということも学びました。

大仙市は「音と光と水の街」というキャッチフレーズがある街です。音楽活動が盛んな街、全国的にも有名な花火の街…。そんな街の環境をさらにより良くすれば、もっと住みやすい街になるのではないかと思い、「大仙市の環境をより良くするためには？」というテーマで調べてみようと思いました。

II 調べた結果

1. アンケート調査

ホストマザーに自分の周りの環境についてアンケートをお願いしました。

★ ホストマザーに聞いたこと

ホストマザーにアンケートの答えを手書きしてもらいました。

Q 1 : Do you think about environment protection?

(あなたは環境について考えていますか?)

Answer : Yes.

(はい。)

Q 2 : Do you classification? What?

(あなたは分別をしていますか? 何ですか?)

Answer : We make sure sprays for chemicals are safely stored to try to protect trees.

(スプレー缶などは、木を守るために安全に分別しています。)

Q 3 : Do you water conservation? What?

(あなたは節水をしていますか？ 何ですか？)

Answer : Yes. We have dams in each paddock to try to keep waterways free of wash down.

(ダムが地域ごとにあり、必要に応じて水路が確保されています。)

このアンケートは、事前学習会の中、自分で考えて、英語に訳して持って行きました。質問内容を訳すことはとても難しかったので大変勉強になりました。また、私の文章が分かりにくかったのにもかかわらず、ホストマザーは一つ一つ丁寧に答えてくれました。一つ反省は、ホストマザーは字が達筆で、訳せない箇所もあり、現地でしっかり聞いておけばよかったなと思いました。

2. アンケートを通して考えたこと

ホストマザーは、水を大切に使用していることが良く分かりました。

- ① 近くにはいくつかのダムがあり、雨水を濾過して利用している。
- ② シャワー時間が決まっていて、短時間でシャワーを終えなければいけない。バスルームにはトイレもあるので、長時間のシャワーはトイレが使えず、困ることにもなる。
- ③ 生ゴミを出さない工夫もしていた。ベーコンの脂身や、冷蔵庫に保存できないものなども生ゴミとして捨てずに、猫や犬などに餌として与えていた。

Ⅲ まとめ

アンケートの答えやホストマザーの説明、そして、3日間のファームステイから、大仙市とオーストラリアの人々の、環境保護に対する考え方について考えてみました。

オーストラリアでは、節水など、環境に対する意識は高いものがありました。そして大仙市でも、夏休みと冬休みに“エコチャレンジ”というものを実施しています。一週間、エコに関する取り組みをするもので、私もそれに参加しました。

東日本大震災があったとき、大仙市の被害はそれほど大きくなかったのですが、数日間は電気が止まり、断水した状況で生活をしました。普段あたりまえに使っている電気や水、資源の大切さを改めて知ることができました。普段から節電・節水など、出来ることから実践し、資源を大切に使うことで少しでも環境保護につながるようにしていきたいです。

IV オーストラリア派遣の感想



1月4日、オーストラリアに到着。初めての海外、初めての英語、初めてだらけの長旅は不安の方が大きかったのですが、ゴールドコーストに着いた時、不安は期待に変わりました。冬から夏へ、大仙市との気温差は20度もありました。看板や標識、もちろん自動販売機まで全て英語でした。

空港で日本人ガイドの朋子さんと会いました。朋子さんはオーストラリアに住んでいるようで、オーストラリアに関する様々な事を教えてくれました。1番驚いたことは、車は日本と同じ左側通行で、運転席も右側についていたことです。オーストラリアもアメリカなどと同じく右側通行だと思っていたので驚きました。ベンツなど外国メーカーの車は、運転席が左側についていますが、オーストラリアで乗る場合には、右側に付け直さなければならないそうです。また、シートベルトをしないと、運転手だけではなく、しなかった本人も罰金を払わなくてはならないそうです。オーストラリアの法律がこんなに厳しいものだとは知りませんでした。オーストラリアの新しい一面を知った朋子さんのお話でした。

1. ファームステイ

私がお世話になったのは、たくさんの馬や牛を飼っているお宅でした。



手伝った仕事は、馬や牛、鳥などの動物のお世話がメインでした。その他には柵の補強作業をしたり、みんなでおやつクッキーを作ったりして過ごしました。



初日にホストマザーは私たちをスーパーに連れて行ってくれました。店内を見てまず驚いたのは、全てのものが大き



かったことです。買い物かごや飲み物のボトル、お肉や野菜すべてがビッグサイズです。果物も、日本では見かけ



ないものがたくさんありました。また、醤油など日本のものもあり、中には漢字やひらがなの表示のあるものも並んでいました。スーパーを一巡して気づいたのは、魚が無いということでした。どこを見てもお肉しか売っていません。あとでホストマザーに聞

いたところ、あまり魚を食べる習慣がない
そうで、特に刺身のように生で食べる習慣
は日本特有のもののようにです。



果物売り場の計量器



売っていた醤油

夕方には敷地内を車でドライブして、牛を移動させたり、野生のカンガルーを探し
に行ったりしました。3日間日常会話が英語という生活ははじめてだったので、貴重な
体験となりました。

* F a m i l y *

- ・ Lincoln…仕事であまり会えませんでした、背の高い
面白い人でした。
- ・ Kimi …馬が大好きで、25頭それぞれに名前をつけ
かわいがっていました。
とても優しい人でした。



2. 食事

〈breakfast〉 → 〈tea time〉 → 〈lunch〉 → 〈dinner〉 → 〈dessert〉



オーストラリアの朝食は簡単に済ませるものが多く、
主にパンケーキやトーストなどでした。tea time は日
本で言うおやつので、ホストマザーとクッキーや、
スコーンなどを作って食べました。

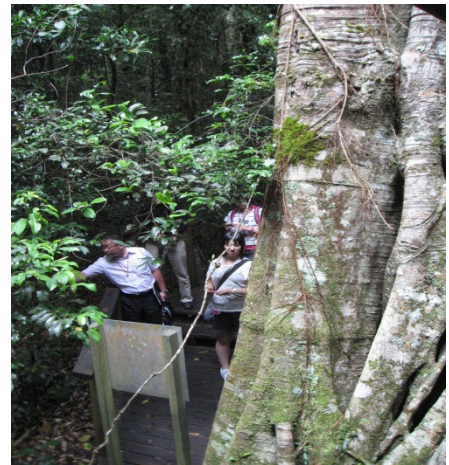
昼食はピザ。これが一番美味しかったです。

夕食はチキンやスパゲッティなどで、デザートが付
いています。

↑これは2日目に私たちが作った“お好み焼き”です。ホストマザーは魚が苦手なそ
うで、「No fish」と言っていたので、ホストマザー用に鰹節無しのお好み焼きも作り
ました。

3. 世界自然遺産 グリーンマウンテン

5日目に、自然遺産に登録されているグリーンマウンテンを歩きました。日本では見られない熱帯植物が多く、巨木に日光を遮られた森の中はとても涼しかったです。歩いていると、根本が黒く焦げている木が多数ありました。朋子さんによると、オーストラリアは非常に乾燥しているため、山火事が多く起きるそうです。山火事は大変なこと、と思いますが、山火事が起こらないと種子を飛ばせない特殊な植物もあるそうです。また巨木だけではなく、背丈の低い小さな植物



野鳥の餌付け

もあります。小さな植物には僅かな日光しか届かないため、巨木が雷に打たれ倒れている数年間だけ十分に光合成を行えるそうです。

←カラフルな野鳥がたくさんいました。

4. カランビンワイルドパーク



カランビンワイルドパークには、コアラやカンガルーといったオーストラリア固有の可愛い動物がいました。

オーストラリアの中でもここクイーンズランド州は、コアラを直接抱いて記念写真が撮れる数少ない州です。野生のコアラを保護するために募金活動を行っていて、約 20 ドルでコアラを抱っこして記念写真が撮れるそうです。またコアラは先住民族アボリジニの言葉で「水を飲まない」という意味だそうです。



カンガルーは放し飼いにされていて触ることができました。とてもふわふわしていて、子供と大人の毛の色が違っていました。このカランビンワイルドパークには、とても珍しい木に登るカンガルーがいて、普通のカンガルーと違い、木の上で生活をするそうです。黄色い毛並みで、尻尾がとても長かったのが印象的でした。カンガルーは、オーストラリアのシンボルにもなっていて、国産の食べ物にはカンガルーマークがついていました。

V おわりに

この海外派遣で過ごした8日間は、私にとってとても実りのある充実したものでした。オーストラリアの人たちはみんな親切な人たちばかりで、何も知らない私に積極的に話しかけてくれたり、色々な事を教えてくれたりしました。英語ばかりの生活で大丈夫だろうか、と不安でしたが、ALTの先生に教わった「身振り手振りでアイコンタクトを取る」というアドバイスを実践し、伝える気持ちがあれば、言葉は違っても通じる事が分かりました。オーストラリアの美味しい食、美しく広大な大自然、可愛らしい動物たち…。たくさんの“オーストラリア”に触れ、学び、楽しむことが出来て本当に良かったと思います。この貴重な体験で学んだことを生かし、大仙市に貢献できる人になれるよう、そして大仙市の環境がよりよく、住みやすい街になるよう、自分も努めていきたいと思っています。





AUSTRALIAレポート

派遣生番号 No.6

大仙市立大曲中学校 2年 鈴木 愛理

◇はじめに◇

私は、以前から人種や環境、見方が違う人達と交流をして、新しい発見をしたいと思っていました。そしてこの海外派遣事業は、それを実現することができ、普段勉強している英語がどのくらい通じるのかを知ることができる良い機会だと思い応募しました。

私は今回の海外派遣事業で、自分のテーマについて調べてくることだけではなく、もう一つ目的をもっていました。それは、「日本人の心を伝える」ということです。私は、日本人の「心」は、世界に誇れるものだと思っています。東日本大震災は多くの人にとって、日本人の心の強さ、優しさを改めて感じる機会になったのではないのでしょうか。そんな日本人の心を、小学1年生から習っている習字や日本の文化を通して、AUSTRALIAで紹介してきました。

◇テーマ設定の理由◇

「自然保護のためには、普段の生活からどのように活動していけばいいか」

今、地球では温暖化が進み、豪雨・干ばつなどの異常気象の増加や、生態系への影響、水不足が起こりつつあります。そんな温暖化を止めるためにも、自然保護をしていかなければなりません。AUSTRALIAは、自然遺産に登録されている場所が14か所、国立公園に指定されている場所が493か所、自然保護区になっている場所が1500か所以上もある、自然豊かな国です。そのため、自然保護に対する意識はとても高いと聞きました。そんなAUSTRALIAだからこそ学べる、普段の生活から環境について意識していることを知りたいと思いました。そして、その意識していることを私も実行していき、身の回りにある自然を守っていかれたらいいと思い、このテーマを設定しました

◇分かったこと◇

AUSTRALIAの生活を体験して、私が1番強く感じたことは、AUSTRALIAの人達

は、水を大切にすることということです。私がファームステイした、Duncanさん宅では、敷地内にため池がありました。雨水などが溜まっている池の水は、家までポンプで運ばれ、タンクに貯められていました。ホストマザーのKathyの話によると、家で育てているお花や野菜の水やりに使ったり、外で作業をする時に使ったりしているそうです。土地が広いAUSTRALIAならではの工



Duncanさん宅のため池

夫だと思いました。土地が狭い日本では、容器に雨水をためて利用すると節水になると思ったので、これから実行していきたいと思います。

ため池のほかに、シャワーの使い方にも水を大切にすることの工夫がありました。シャワーは、「だいたい1人3分」と決まっていたのでした。私は、今までシャワーを使う時、時間や水について全くと言っていいほど気にしたことがありませんでした。ですから、この話を聞いたときは驚き、それをいざ実行するとなった時もあせってしまい大変でした。でも、どうにか自分なりに工夫することができたと思います。

AUSTRALIAでは、節水のほかにも環境にやさしい取り組みを見ることができました。それは電気を大切にすることということです。Duncanさん宅は、家で使うほとんどの電気が、太陽光発電でできた電気だということを知りました。秋田では、あまり太陽光発電が普及していないということもあつたか、今までは「本当に太陽の光で、生活のすべてを賄えるくらいの電気ができるのか」と思っていたのですが、AUSTRALIAにきてその疑問が解決されました。私達が滞在したゴールドコーストは熱帯雨林気候のため年間の晴れの日確率が高いので、太陽の光を上手に使うことができるのだと思いました。

AUSTRALIAでガイドをしてくださった、朋子さんに質問をしました

- Q. AUSTRALIAで環境を守るために普段の生活から気をつけていることはありますか？
- A. 買い物時に袋をもらわないで、エコバッグを使っています。
- Q. 環境を守るために国で決められていることはありますか？
- A. 木を勝手に切ることが禁止されています。それから、個人的に花火をすることが

禁止されています。(周りに自然が多く乾燥しているので、火がついたときに、大火事になってしまうから。)

◇まとめ◇

AUSTRALIAの人達は、環境について普段の生活からよく考え、行動していることが分かりました。そして同時に、環境問題に対する意識の高さを感じました。だからこそ、広大で、きれいな自然が守られているのだと思います。AUSTRALIAの人達が環境を守るために工夫していることの中には、日本でも実行されていることもあり、逆にAUSTRALIAならではの工夫の仕方もありました。環境問題が重視される中で、AUSTRALIAの人達の意識の高さや行動は、日本人が見習うべき姿だと私は感じました。私が今回実際にAUSTRALIAの生活を経験し、学んだことを、これからは生かしていけるように、私達が普段の生活から実行していけることを考えました。

- * 屋外に容器を置き、雨水を貯め、花の水やりなどに利用する
 - * お風呂に入るときや、手を洗うときに、水を流しっぱなしにしない
 - * 夜は早く寝て、電気をあまり使わないようにする
 - * 買い物をする時は、できるだけ買い物袋をもらわないでエコバッグを使う
- この他にも、できることがあると思うので、できることから少しずつでも実行していきたいと思います。

◇AUSTRALIAでの思い出◇

1月3日 (Tue)

たくさんの思いを持ち、秋田から東京を経由して、ゴールドコースト空港に向かいました。気持ちが高まっているためか、飛行機では眠ることができませんでした。

1月4日 (Wed)

朝にゴールドコースト空港に着きました。バスからの景色を見て、AUSTRALIAに着いた実感がわいてきました。そして、3日間お世話になるファームステイ先の、ホストファミリーと対面式をしました。ホストファザーの *Duncan* は、私達を温かく家に迎えてくれました。そして、私が家に着いて驚いたことは、敷地の広さです。そこにはプールやテニスコートもあって、AUSTRALIAの広さを改めて感じました。お昼にホストマザーの *Kathy* が仕事から帰ってきたので、みんなでガーデニングをしたり、馬やロバに



餌をあげたりしました。動物は、みんなおとなしくて、かわいかったです。

ファームステイ1日目はとても、長く感じられました。

1月5日 (Thu)



午前は、野菜を植える手伝いをしました。力仕事もあったので大変でしたが、みんなで協力して植えました。お昼には日本から持っていた、『そうめん』を作りました。ホストファミリーの二人が「おいしい」と言って食べてくれたのでよかったです。午後からは、Kathyが買い物に連れていってくれました。夜は、バーベキューをしました。AUSTRALIAでは、1週間に一回のペースでバーベキューをしているそうです。

1月6日 (Fri)

ファームステイ最後の日は、買い物と国立公園に連れて行ってもらいました。たくさんのお店に入りましたが、一軒一軒がとてもかわいくて、映画の世界に入ったようでした。

国立公園では、滝を見に行く途中で蛇に遭遇しました。Kathyがすばやく私達を誘導してくれたので、無事に滝まで行くことができました。滝は、今まで見たことがないくらいきれいで、感動しました。AUSTRALIAの自然の命を強く感じました。



1月7日 (Sat)

ついに3日間お世話になった、2人とのお別れの日になり、とても寂しい気持ちになりました。Duncan、Kathy、3日間本当にありがとうございました。



ホストファミリーと別れた後、世界遺産のグリーンマウンテンや動物園に行きました。動物園では、日本では見ることでできない珍しい動物をたくさん見る事ができたので、楽しかったです。

1月8日 (Sun)

午前には船に乗って、AUSTRALIAの海を見ました。日本の海とは比べものにならないくらいきれいで、ここでも、AUSTRALIAの人たちの環境問題に対する意識の高さを感じました。

お昼には、オーギーキッズと交流をしました。私たちと同じ14歳の子が、とても美しく大人びていたのでショックをうけました。でも、話してみると音楽の趣味などにつ

いて話が合ったので、楽しかったです。

夜は、サーファーズパラダイス散策をしました。自分たちだけで歩いたり、買い物をしたりすることは、少し不安でしたが、勇気を出して道を聞いたり、自分の力でお金を使って買い物したりすることは、いい経験になったと思います。

1月9日 (Mon)

午前中に AUSTRALIA を出発しました。飛行機の中では、今までの思い出を振り返り、「もっと、AUSTRALIA にいたかったな」と、感じました。成田空港につき、秋田に向かうバスに乗った時には、日本に帰ってきた実感がわいてきました。

◇日本文化の紹介◇

私は日本人の「心」を伝えるために、おみやげとして自分で書いた習字を持っていき、ホストファミリーや、交流をしたオーギーキッズにわたしました。そして、書かれている文字の意味を説明し、習字について紹介しました。すると、「Beautiful !」と言って「AUSTRALIA でも習字は人気があるんだよ」ということを教えてくれました。日本の文化は世界にも知られているということが分かり、うれしい気持ちになりました。ファームステイ先では、折り紙を折って、泊まらせてもらった部屋に飾ってきました。日本人が大切に守ってきた文化や心を、伝えることができたと思います。



◇海外研修を終えて◇

1月3日から1月10日までの8日間は私にとって、とても有意義な時間でした。“人種や環境、見方が違う人たちと交流をして、新しい発見をしたい”という願いを、実現することができたと思います。そして、AUSTRALIA の人たちに日本人の「心」を伝えたいという思いも、日本の文化などを通して、伝えることができたと思います。この海外派遣事業で、たくさんの人たちに出会うことができ、たくさんの経験をさせてもらいました。そのどれもが、とても大切な思い出です。この経験を、これからはいかしていきたいです。

そして私は、海外派遣事業を終えて、「もっと深く海外について知り、世界の人たちと交流をしたい」と思いました。そのためにも、よりよいコミュニケーションがとれるよう、英語などの勉強をしていきたいと思います。

最後に、今回お世話になったみなさん、



本当にありがとうございました



オーストラリアで学んだこと

No.7 大曲中学校 鈴木 瑛亮

I. はじめに

僕がオーストラリア派遣事業に参加した理由は簡単でした。

「僕の英語が海外でどれほど通じるのか」「英語が通じないときはどのようにすればいいのか知りたい」単純にそんな気持ちからでした。

II. テーマ

日本は自然に関して様々な問題を抱えています。例えば、一見自然が豊富に見えても、実際に人の手がかかっていない自然は数少ないと思います。そこで僕はテーマを、「自然環境をどのように保護していくか」にしました。

III. オーストラリアの自然

まずは、オーストラリアと日本の比較を簡単にしたいと思います。

	オーストラリア	日本
面積	7,686,850 km ²	377,914 km ²
人口	21,293,000 人	128,056,026 人
通貨	オーストラリアドル	日本円
地域	オセアニア	アジア
言語	英語	日本語

オーストラリアは、日本より広大な面積であるにもかかわらず、日本の六分の一ほどの人口です。気候や風土、人口密度など、大きな違いはありますが、日本が参考にできるところもあるのではないかと思います。また、動物とふれあっている時間も長いオーストラリア人は、「日本にとって、手本となるべき存在なのでは？」と思い、オーストラリアの自然について調べてみよう



と思いました。そこから、自然環境の保護に関する、何かしらのヒントが見えてくるのではないかと思ったからです。

オーストラリアは、のんびりしているところです。自然豊かな風景、放牧されて生き生きとしている動物たち。日常生活ではなかなか見ることのできない貴重

なものを見ることができました。

オーストラリアでは、人間が自然に合わせるような生き方をしています。

たとえば、動物を飼っている人たちのほとんどが放牧をしているため、中には何かのはずみで市街に出よ

うとしてしまう動物たちもいます。そこで、動物が通れないような柵を作ったり、あえてでこぼこした金属をコンクリートの道に埋めたりしているのです。人々は動物を理解し、そして共生しているのだと思います。

オーストラリアに住んでいる人たちは多くの動物に囲まれて暮らしていました。僕たちがファームス

テイでお世話になったアンニョレットさんの家にも、アルパカやクジャクなど、たくさんの動物がいました。また、アンニョレットさんの知り合いの人の家でも、豚やにわとりなど、たくさんの動物を見せていただき、馬にも乗せてもらいました。乗馬は初めての経験で緊張しましたが、乗ってみると馬の背中はしっかりしていて、とても乗り心地が良かったです。動物たちと楽しく過ごすことができました。



IV. 動物園にて

僕たちは、動物園にも行きました。この入場料は、近くの動物病院の営業資金にあてられると

添乗員さんから聞きました。またこの病院では、動物園の動物以外にも、一般家庭の動物まで診てくれると聞き、驚きました。

僕はここで初めてカンガルーを触りました。オーストラリアに来てから何度か見かけたものの、すぐ逃げられてしまうので、触れるのはうれしい気持ちでした。カンガルーは筋肉がムキムキと硬い体をしていました。コアラを抱っこして写真を撮るコーナーがあったのですが撮らずじまいでした。20ドルくらい料金がかかるのですが、世界のコアラを守るための基金になるから、撮ればよかった・・・と、少し後悔しています。でも、かなり近い距離から見ることはよかったと思います。

ほかにもアボリジニのダンスショーを見てみんなで盛りあがったり、バードウォッチングコーナーできれいな鳥を見たりして楽しみました。この動物園は忘れられないものになりました。できれば、動物園内を移動できる列車に乗りたかった・・・。いつかチャンスがあったらまた行きたい、そして今度は全部のコーナーを移動できる列車を使ってゆっくりと回りたいと思います。



V. まとめ

オーストラリアには日本にいたらわからなかったことや体験できなかったことがたくさんありました。やっぱりオーストラリアに行ってよかった。そう感じています。

研修の色々な場面で、僕は、オーストラリアの人たちは自然と「共存」、「共生」しているのだなと感じました。彼らは、ただ自然を愛するのではなく、人間が動物をいたわれれば、めぐりめぐって

自分に返ってくる。そういうサイクルのようなものも理解していて、人間も大自然の一部なのだとよく知っているからこそ、動物たちと「共存」、「共生」できるのではないかと思います。表で示したように、オーストラリアと日本にはいろいろな違いがありますが、日本にもこういう考えが広がっていけばいいなど、そして、日本の自然がもっと豊かになっていけばいいなどと思います。自然環境を保護していくために、僕はまずそのような気持ちの持ち方を大事にしていきたいです。

また英語について言えば、実際、僕の英語はなかなか通じないし、単語とジェスチャーだけで相手の人に理解してもらうのが精一杯でした。会話の中に日本語が入ってしまい、相手もさぞ聞きにくかったことでしょう。こんなにも頼りない英語で申し訳ないと思うとともに、理解してくださった現地の方々に感謝しています。なんとかわかってもらいたくて、頑張っただけで伝えようとしたから、相手に伝わったのではないかと思います。

最後に、オーストラリアでお世話になったアンニョレットさんや、いろいろなことを聞かせてくれた添乗員さん、本当にありがとうございました。今回の体験を生かして、将来社会で活躍できるように頑張りたいです。

私のオーストラリア見聞録

～少子高齢化問題を日本とオーストラリアで考える～

No.8 大曲中学校 2年 鈴木 志保

I はじめに

私は習字と英語を習っています。将来の夢はまだはっきりしていませんが、できればせつかく習っているこの習字と英語を生かす仕事に就きたいと考えています。そんな時に、このオーストラリア研修の話を知り、「自分が学んでいる英語は海外で通じるのか。それを確かめてみたい」、「習字などの日本文化を海外にもひろめたい」、「日常生活とは違う、広い世界を自分の目で見てみたい」と考えました。それが、今回のオーストラリア研修に申し込んだ大きな理由です。

いろいろお世話をしてくださった大仙市教育委員会の方々や旅行者さん、私の希望を聞いてくれた家族に感謝する気持ちを込めて、今回の旅で見聞きしたこと、考えたことをレポートにまとめたいと思います。

II テーマ設定の理由

研修への参加が正式に決まり、研修テーマを考えている時に、頭の中に残っている新聞記事がありました。それが右の新聞記事です。見出しには「本県高齢化率全国一」「29.6%、島根抜く」「人口減少率もトップ」とあり、2010年の国勢調査の結果、秋田県が、ついに高齢化率（総人口に占める65歳以上の割合）で全国トップに立ったというニュースが伝えられています。

人口が減ってきている、子どもが少なくなり、お年寄りが多くなってきているという、少子高齢化が進んでいることはなんとなく知っていましたが、何が問題になっているのか、どんな対策をとっているのかなど、詳しいことは全然知りませんでした。そこで、せつかくオーストラリアに行くのだから、日本とオーストラリアの両方でこの問題を考えてみるのもおもしろいと思い、

「少子高齢化社会の中で、私たちはどんな生き方ができるのだろうか？」を自主研修テーマにしました。



▲2011. 10.27 秋田魁新報

III 少子高齢化について調べたこと

(1) 日本で調べたこと

オーストラリアに行く前、行った後に、インターネットを中心に日本とオーストラリアの少子高齢化問題について調べてみました。わかったことをいくつかご紹介します。

① 高い日本の高齢化率

2010年の国勢調査によると、日本の高齢化率は23.0%で、これはドイツやイタリアを上回る世界最高水準にあるそうです。ちなみにオーストラリアの高齢化率は13.3%と先進国の中では低い水準にあります。この理由として、第2次世界大戦後にオーストラリアに移ってきた「移民」が多いことが挙げられます。

※ちなみに秋田県の高齢化率29.6%は全国トップ。大仙市のそれは県平均を上回る31.6%で、私たちが住んでいる地域は、世界的な「高齢社会」であると言えます。

② 平均寿命は世界のNo. 1、No. 2

平均寿命は、日本が女性86.4歳、男性79.6歳。オーストラリアが、女性83.7歳、男性79.0歳で、日本、オーストラリアが世界のNo.1、No.2になっているそうです。日本が世界で最も長寿の国であるということは知っていましたが、オーストラリアが2位ということは知りませんでした。「気候が温暖で住みやすい、(イメージですが)人々がのんびりしていることが、長寿の理由なのかな」と思いました。

③ お年寄りには地域・家庭で

オーストラリアは、1985年に「ホーム・アンド・コミュニティ・ケア」と呼ばれる制度を導入し、それまでの「高齢者の面倒を見るのは、老人ホームなどの施設」という考え方から、「高齢者を地域や家庭で支えていく」という考え方に、国の政策を大きく変えていきました。こうした考え方は、今では一般的になってきましたが、当時、このような制度を取り入れている国は、あまり多くありませんでした。高齢になり、病気や障害があっても、住み慣れた家から離れずに生活ができるように、地域が支援するしくみができています。掃除・洗たく・アイロンがけ・シャワー・買い物へのつきそい・食事の準備・宅配サービス・運転代行等々、いろいろなサービスの提供を受けることができるほか、地域には、お年寄りが集まるデイケアセンターがあり、ここがお年寄りの余暇活動の場、社交の場となっているそうです。

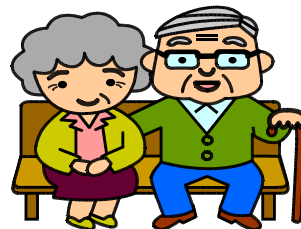


④ 高齢者94%は自宅で、30%はボランティアも

③の「ホーム・アンド・コミュニティ・ケア」制度導入の結果、現在オーストラリアでは、65歳以上の高齢者のうち、94%は自宅で家族と一緒に生活をし、6%の人が老人ホームや病院などの施設で生活しているそうです。85歳を越えると、自宅以外の場所で生活をする高齢者の割合が26%にのぼりますが、それでも自宅で生活をする人が74%いて、全体で29%の人が自宅でひとり暮らしをしているそうです。日本ではどれくらいの割合の人が自宅で生活しているのかが気になります。

また高齢者も地域活動に積極的に貢献しており、65歳～74歳の約30%がボランティア活動を行っています。高齢者のお世話をするという内容が多く、元気で余裕のあるお年寄りが、支援を必要としているお年寄りを助けるというしくみができており、このことが、オーストラリアの高齢者を支える大きな柱となっているそうです。

国土が広く、生活には自動車の運転が欠かせませんが、85歳を過ぎると運転率は大きく下がるため、こうした人々の「移動」を支えることも、とても大事に考えられているそうです。



⑤ 少子化対策は移民で

オーストラリアは、アメリカと同じ「移民」の国です。「国を発展させるには、若くて技術のある優秀な人を海外から移民させることが必要」という考え方が一般的で、今も毎年たくさんの移民を受け入れています。移民の中で多いのは、中国やインド出身の人で、その数は毎年数万人にもものぼるそうです。オーストラリアでも、様々な「子育て支援」政策があるようですが、この移民の受け入れが少子化対策の大きな柱となっているということが言えます。ちなみにある統計によると、日本が毎年65万人程度の移民を受け入れたら、日本の

少子高齢化問題は解決するという意見もあるそうです。それはそれで、いろいろな問題が起こってくるようにも思いますが、皆さんはこの意見をどう思いますか。

(2) オーストラリアで見聞きしたこと

私は、クィーンズランド州のカナングラという町の近くにあるボーデザート地区でファームステイをしました。ホストファミリーはDuncan(ダンカン)さん、Kathryn(キャサリン)さんというご夫婦です。2人ともとても気さくで明るい人で、牧場(牛やアルパカが多数)を営んで生活を営んでいました。牧場は、大自然に囲まれていて、野生のワラビーがたくさん出没していました。

私は、この2人にオーストラリアの少子高齢化について、いろいろとインタビューをしてみました。質問の内容が難しく、自分の聞きたいことを相手に伝えるのが大変でしたが、英語で質問すること自体がとても勉強になりました。2人の答えは次のようなものでした。

オーストラリアでも、徐々に少子高齢化が進んできており、この問題についての関心は高まってきている。政府は子育て支援策として、子どもが高校を卒業するまでの間、補助金を毎月支給している。

病気にかかっている人や90歳を超えるような高齢者は、病院などの施設で暮らしているが、ほとんどの高齢者は、家で家族と一緒に過ごしている。



▲キャサリン & ダンカン

ファームステイ期間中、私たちは車で15分ほどの距離にあるキャサリンの実家に連れて行ってもらいました。

キャサリンの実家も牧場を営んでいて、そこにはたくさんの牛、馬、羊、ニワトリが飼われていました。

キャサリンのお父さん、お母さんは2人とも元気で大自然の中でゆったりと暮らしているように見えました。キャサリンは離れて暮らしてはいますが、何日かおきに両親の元を訪ねているようでした。帰り道、キャサリンはある建物の前で車を止め、私に向かってこう言いました。「これが老人ホームだよ」。中に入ることはできませんでしたが、ボランティア活動で何度か訪れたことのある日本の老人ホームよりも規模が大きく、開放的な印象をもちました。

こうした少子高齢化についてのやりとりをする時間があまりもてなかったこと、英語力が十分ではなくいろいろと詳しく聞けなかったことは残念でしたが、日本で調べていったことのいくつかについて、現地で確認することができたことは大きな収穫だったと思います。



▲老人ホーム



▲ステイ先の家

IV 思い出あれこれ

ここで、研修テーマと離れて今回のオーストラリア研修の思い出を写真で少し紹介します。たくさんの思い出ができた今回の旅行でしたが、敢えて上位3つを選ぶとすると、次に挙げることが特に心に残っています。

第1位	コアラ、カンガルーに会えた！ カワイイというよりやや凶暴？
第2位	野菜不足に悩む日々？ ポテト、肉中心の食事に「日本食が恋しい！」
第3位	やっぱり季節は逆だった！ オーストラリアにはカラッと晴れた青空がよく似合う！



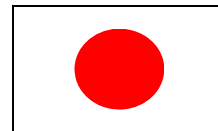
▲動物園でコアラ&カンガルーと2ショット！ こんなに間近で触れあえるとは思っていなかったので少し緊張しました。コアラは予想していたよりも重く、ツメがかなり鋭くて少しこわかったです。カンガルーはTVでみるよりも小さくて人なつっこかったです。

▲ヤギといっしょ
(とにかくオーストラリアは、あちこちに動物が…)



←タンパリン国立公園にて (左)

←オージーキッズといっしょに
(みんなとても同じ年齢の中学生には見えなかった)
(右)



V 海外研修を終えて

少子高齢化と言うと「暗い」感じがしますが、今回オーストラリアで出会った人々の生き方に、研修テーマ「少子高齢化社会の中で、私たちはどんな生き方ができるだろうか」の答えがあったような気がします。オーストラリアで生きる人たちは、大自然の中で、たくさんの動物たちと一緒に「自然の中の一部のように」のんびりと暮らしていました。これが長寿世界第2位の最も大きな理由なのかもしれません。牧場経営には定年が無く、キャサリンのお父さん・お母さんのように高齢になっても動物と一緒に暮らして、自分たちの生活を支えている人が、オーストラリアにはたくさんいるようでした。実際にそれを見ることはできませんでしたが、オーストラリアでは、地域が高齢者を支えているしくみも十分に整備されているようでした。

このレポートをまとめている時、私はある人のことを思い出していました。それは、同じ大仙市の中仙地域に住む祖母のことです。現在65歳の祖母は、会社勤めはしていませんが、田んぼや畑仕事に忙しく、近所の農作業の手伝いにもよく出かけてるようで、「退職」したという感じはまったくありません。とにかく元気です。こういうお年寄り、このあたりの地域にはたくさんいるように思います。そして、それはオーストラリアのお年寄りの生活とどこか似ているようにも思います。

秋田県の高齢化率が全国トップになりましたが、自然の中で、元気に働くお年寄りこそが、秋田県の宝だと思えます。少子高齢化をあまり意識し過ぎず、「今まで通り」が案外いいのかもしれません。

たくさんの思い出をありがとうございました。いつの日か是非またオーストラリアへ。

私が見た！！ Australia

No.9 大曲中学校 高橋 遥

<はじめに>

私は人とコミュニケーションをとることが好きなので、外国の方々ともたくさんコミュニケーションをとって自分の視野・可能性を広げたいと思い、この派遣事業に参加しました。私は英語力が高いわけではないので、自分が思っていることをきちんと伝えられるか不安でいっぱいでしたが、ジェスチャーを交え必死に伝えることで、理解してもらえたので安心しました。

テーマ バリアフリーに対する関心を高めるには？

<テーマ設定の理由>

私は、よく母と買い物に行くのですが、日頃から気になっていることがあります。それは、車椅子の方専用の駐車スペースに、健常者の方が平気な顔をして駐車していくことです。最近は、少しずつ工夫されてきていて、大型ショッピングセンターなどには『身障者専用駐車場ゲート』などを設置している所もありますが、そういった工夫がなされていない所がほとんどです。しかし、問題は設備ではなく、バリアフリーに対する関心が低いことにあると思います。

- ・オーストラリアではどのような工夫がされているのか？
- ・バリアフリーに対する関心度はどれくらいなのか？

この2つについて調べたいと強く感じました。また、オーストラリアと日本の考え方の違いを知ることで、バリアフリーへの関心を高めるためのヒントを得られると思いました。

<バリアフリーに関するQ & A>

ホストマザーとガイドの朋子さんに質問してみました。

Q 1. バリアフリーについて関心はありますか。

A 1. オーストラリアは国全体で関心がとても高い。20年くらい前は全く違ったが、身障者のケアをしない人が多いことを嘆き、国へ意見を言った人がいた。その1人の勇気が国を動かした。

Q 2. 身障者の方々のためにどのような工夫がなされていると思いますか。

- A 2.
- ①電車・バス・タクシー・スーパーマーケット・海などにスロープやリフトがついている。
 - ②歩道や店の入口は段差がなく、車椅子の方も利用しやすくなっている。
 - ③車椅子専用スペースに車椅子マークのない車を駐車すると罰金を支払わなくてはならない。



海への入口にもスロープが！

- ④店内などにある車椅子は国からの援助でまかなっている。
- ⑤どんな施設にも身障者専用トイレがある。

さまざまな場所に行きましたが →
車道や歩道に段差が全く無い所がほとんどでした



< バリアフリーに対する関心を高めるには・・・ >

オーストラリアは国土面積は広いですが、人口は比較的少なく、お互いに相手に対してとてもオープンな雰囲気、積極的にコミュニケーションをとる人が多いようです。“どんな人(自国・他国関係なく)でも、受け入れる・助け合う”文化が根付いており、国自体の福祉についての関心が高いからこそ、国民一人一人の関心も高いのだと思いました。

日本は面積が狭く人口が多いわりには、積極的にコミュニケーションをとる人が少ないと思います。そのため「誰かがやるから自分はやらなくてよい」という考え方があり、社会全体に対する関心が薄くなっていると思います。また、オーストラリアに比べてバリアフリーの設備が整っていないため、お年寄りや身障者の介護などを身近な人に頼りすぎていると感じます。

このことから、バリアフリーに対する関心を高める第一歩として「誰かがやるからよいだろう」という考え方を見直し、変えることが必要だと思います。さらに、家族や地域とのコミュニケーションを深め、身障者やお年寄りの方々と交流する機会を増やし、直接声を聞く事で関心が高まると思います。

<< ファームステイ先で・・・Ⅰ >>

エコについての関心も高いようで様々な工夫がされていました。私たちにもできそうな工夫があったのでご紹介します。



★ 食器洗い★

洗い物は二つのシンクにお湯をためて行いました。片方のお湯には洗剤を入れて、そこに汚れた食器を入れて洗い、お湯のみが入った方で泡を軽く流していました。1食分の食器を同じ水を使って洗うので、水を無駄に使わないための良い工夫だと思いました。

★ 残ったおかず★

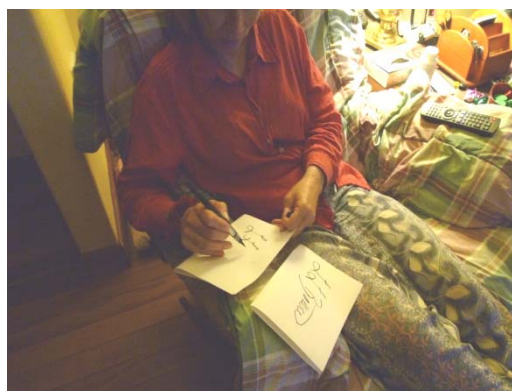
残ってしまったおかずは保存容器に移し入れ保存しておき、次の食事でもいただきました。それをおかずがなくなるまで繰り返していました。火を通す食べ物がほとんどだからこそできることです。家ではすぐラップを使いがちですが、このゴミの出ない方法はすぐに真似できそうだと思います。



<< ファームステイ先で・・・Ⅱ >>

私達は日本文化を伝えるため、ホストファミリーに筆ペン・和紙・折り紙・お手玉・あやとり・扇子をプレゼントしました。ホストマザーに折鶴の作り方を教えながら一緒に折ったときは、完成した折鶴に興味深々でとても喜んでくれました。1枚の紙が立体的な作品になるのが不思議だったようです。幼いころから何気なく遊んでいるこ

とが立派な日本文化の一つなのだと嬉しく感じました。お手玉・あやとりもみんなで楽しみました。筆ペンで和紙にサインを書いてもらいましたが、初めての感触に2人共、真剣かつ楽しそうでした。特にホストファザーの John は “This pen is very good !! ” と喜んでくれました。気に入ってもらえて本当によかったです。



《ファームステイ先で・・・Ⅲ》

John と Lise の家では、10 頭の馬と愛犬テジィをペットとして飼っていました。私たちは、主に馬 4 頭のお世話をしました。そのうち 1 頭は、私たちが到着する 12 時間前に産まれたばかりの『ポピー』という子馬で、自力で立とうと頑張っていました。

ポピーもかわいかったのですが、私のお気に入りには甘えん坊の『レリー』です。とても人なつっこく、私が餌を持っていくと近づいてきてくれました。そして私たちが手伝って作った餌を残さずたくさん食べてくれました。食べている時も Lise に顔をこすりつけて甘えている姿は、本当の親子のようでした。

ファームステイ先では、馬のフンから肥料を作り販売していました。私たちは、毎日馬小屋の掃除をして、フンを集める仕事をしました。たくさんのフンをスコップで取り、集める作業は思っていた以上に力のいる大変な作業でした。

《ファームステイ先で・・・Ⅳ》

私は風邪をひいてしまっていて、John と Lise にたくさん迷惑をかけてしまいました。咳がひどい私を心配して、ビタミン剤や日本でいうはちみつレモンのような温かい飲み物を作ってくれました。少し苦かったけど、のどによく効きました。おいしい料理を作ってくれたり、私たちでもわかるようにゆっくりと話してくれたり、仕事を通して貴重な経験をさせてくれたり、2 人には心から感謝しています。一緒に過ごした 3 日間はとても楽しくてあっという間でしたが、たくさんの思い出が詰まったかけがえのない時間です。



<オーストラリアを満喫>

～カランビンワイルドパーク～

私はカランビンワイルドパークという動物園でコアラをだっこしました。これには約 AU\$20 かかりましたが、このお金はコアラを保護するために使われるそうです。さらに、入園料は動物病院の運営などにあてられるということで、有効に使われてるなあと思いました。ここでは生まれて間もない赤ちゃんコアラやカンガルーたちに癒されました。園内のいたる所に野生のヤモリがいたのには、珍しくてビックリしました。

～オージーキッズとの交流～

現地の7歳から14歳くらいの女の子たちと交流をしました。最初はどのように声をかけたら良いかわからずにはいましたが、友達と勇気を出して声をかけてみました。すると、笑顔で「一緒に遊びましょう！」と言って私の手をとってくれました。

私は仲良くなったアメリカとエミリーと自己紹介をし合って、家族のことなどをたくさん話して距離を縮めることができました。私の、単語と単語をただつなげただけの英語を必死に聞きとってくれてとてもうれしかったです。



<海外派遣事業を終えて>

私はこの海外派遣でコミュニケーションをとることの難しさと楽しさを改めて実感することができました。

自分の意見を伝える時は、相手の目を見てゆっくりと感情をこめて話す事。英語力が足りない部分はジェスチャーを使うなど工夫をする事。話を聞く時は、相手の目を見てどんなことを伝えようとしているのか考えながら聞くと、より深く理解できることに気がつきました。なかなか自分の思いを伝えることができずに悩んだこともありましたが、そんな時は友達に支えてもらい、協力することで乗り越えることができました。

オーストラリアの自然や文化についてはもちろんですが、他校の友達との交流から学んだこともたくさんあります。大切な仲間ができてとても良かったです。

このような貴重な経験をすることができて、この事業に携わって下さったたくさんの方々に参加に同意してくれた家族に感謝しています。

“ I thank you from the bottom of my heart ”

私たちの環境を守るためにはどんな工夫ができるだろうか？

～ ごみの分別を考える ～

No.10 大曲中学校 高山 舞花

I はじめに

私がこの海外派遣事業に参加したいと思った理由は、2つあります。

一つ目は、自分がどれくらい英語で会話ができるのか試したいと思ったからです。授業や塾での英語は書くことが中心なので、英会話の力を試すよい機会だと思いました。

二つ目はオーストラリアの大自然を肌で感じたり、コアラやカンガルーなど日本にはいない動物を直接見たり触ったりしてみたいと思ったからです。

私がファームステイしたのは、肉用牛や競走馬を飼育する大きな牧場でした。日本での日常生活とは違うことばかりで、初めは不安でしたが、ホストファミリーが親切にしてくれたので、とても有意義で楽しい時間を過ごすことが出来ました。

II テーマ設定の理由

事前学習会で、オーストラリアには熱帯雨林や湿原など多くの自然が残されていて、珍しい動植物が多く生息していることを、勉強しました。家族に聞いてみても、オーストラリアは自然が豊かで動物がたくさんいる国だというイメージを持っているようでした。

今、自然の破壊が進み、地球温暖化が大きな問題となっています。もちろん、日本もオーストラリアも例外ではありません。自然環境を守っていくのは大変難しいことだと思います。だから、オーストラリアでは自然を守るためにどのような事をしているか、何か工夫をしている事があるのか興味を持ちました。

私たちも、環境を守るために努力をしなければなりません。オーストラリアで自然環境を守るためにやっている事の中に、私たち日本(大仙市)でも真似をしたり、形を変えて出来る事があるのではないかと思います。『私たちの環境を守るためにはどんな工夫ができるだろうか？』とテーマを設定しました。

III 調べた内容

テーマについて考えるために、『ごみの分別』について調べることにしました。ごみの分別は日本(大仙市)でも行っていることだし、環境を守る第一歩だと思ったからです。

1 ごみの分別について

(1) ファームステイした家では

台所にはごみ箱が二つ置いてありました。理由を説明して、ごみ箱の中を見せてもらいました。

小さいごみ箱には、ビンやペットボトルが入っていました。そして、大きいごみ箱には、紙くずやビニールの袋やティーバッグが入っていました。

オーストラリアの家庭のごみの分別は、『リサイクルできるもの』(ビン・缶・ペットボトル・プラスチック・ダンボール)と『それ以外のもの』

(一般ごみ)の2種類だけだと、マザーが教えてくれました。また、牧場のあちこちに、ごみ箱が二つ並んで置かれていました。



(小さい方のごみ箱)



(大きい方のごみ箱)

(2) 施設や街の中でも

街の中でも、二つ並んで置かれているごみ箱をよく見かけました。大体的場合、一つにはリサイクルできるものの絵や文字が描かれていて、もう一つには紙くずやビニール袋の絵や「waste」の文字が描かれていました。このことから、街の中のごみについても『リサイクルできるもの』と『それ以外の一般ごみ』の2種類に分別されていることが分かりました。

(空港にあったごみ箱)



左はビンやペットボトルの絵
右は紙くずやビニール袋の
絵が描かれている



GLASS, CANS, PLASTIC
の文字が書かれている



WASTE は、ごみ・くず・廃棄
物という意味

(公園にあったごみ箱)



ビン、缶の絵や RECYCLE
の文字が書かれている

街には、ごみがほとんど落ちていません。ごみ箱が短い間隔で置かれているので、ポイ捨てる必要がないからでしょう。10個位ごみ箱が並んで置かれている所もありました。また、変わったものとして、飲料水やジュースの飲み残しを捨てるごみ箱(?)がありました。

2 生ごみについて

ファームステイした家の台所のごみ箱には、生ごみが入っていませんでした。オーストラリアでは、生ごみは乾燥させてからコンポストに入れて肥料にし、畑にまくのが一般的だとマザーが教えてくれました。勝手口の所には、生ごみを乾燥させるための袋が掛けてありました。



牧場で飼育している馬が、私たちが食べたスイカの皮を美味しく食べるのを見ました。その時にファザーが『スイカは馬の大好物なんだ。スイカを食べた馬はフンをする。そのフンは肥料になる。そしてその肥料でまたスイカが育つんだよ。』と話してくれました。また、晩ごはんの時には『オーストラリアではベーコンを大きなブロックで買い仲間カットし、分けるんだ。カットした時に出る脂身は飼っている犬にあげるんだ。犬はとても喜ぶよ。』と話してくれました。

3 まとめ

マザーから聞いた話やいろいろなごみ箱を調べた結果、オーストラリアのごみの分別は2種類だけであることが分かりました。大仙市では5種類なので、大仙市の方が細かく分別されています。特にリサイクルできるものの分別に違いがありました。私は、オーストラリアの方が細かく分別されていると思っていたので、この結果は意外でした。

でも、オーストラリアのごみの処理でとても良いと思ったことがあります。それは生ごみの処理の仕方です。生ごみをごみとして捨てずに、肥料にして再利用していることです。たぶん、大仙市でも生ごみをコンポストに入れ、肥料にして再利用している人はいると思いますが、大部分の人は紙くずなどと一緒に燃やせるごみとして出しているのではないのでしょうか。今は燃やせるごみとして分別しているごみを、更に生ごみとそれ以外の紙くずなどに分別し、生ごみは肥料にして再利用できるシステム(例えば大きなコンポストのような施設)が出来たら良いと思います。

生ごみを再利用できれば燃やすごみの量が減ります。再利用した肥料を使って農作物を作れば化

学肥料の量を減らせます。そうすれば、環境への負荷が少なくなり環境を守ることにつながると思います。

また、日本(大仙市)では、自動販売機の横やコンビニエンスストアにはごみ箱が設置されていますが、街の中や公園にはあまりごみ箱が無いように思います。オーストラリアのように、多くのごみ箱を設置すれば、ポイ捨てが無くなり、街や公園の美化につながるのではないかと思います。

IV ファームステイ

1 優しくったホストファミリー

私たちのホストファミリーは、ファザーとマザーと娘さんの3人家族ですが、娘さんは私たちがステイする前の日(1月3日)にカナダに行ってしまったので不在でした。ファザーは優しくてシャイな人で、マザーは優しくて明るい人でした。私は部活でバドミントンをやっていますが、偶然にも、娘さんもバドミントンをやっていたそうです。



(ステイした家)



(ファザー&マザーと一緒に)

2 とても広かった牧場

ステイした牧場はとても広く、100頭を超える肉牛と30頭ほどの競争馬を飼育していました。また、たくさんの木が生えていて、中には実をつけている木もありました。ファザーの運転する4WDのトラックで、牧場の中を案内してもらいました。貯水タンクや大きく丸められた牧草やエサが出てくる機械など、見たことのない物がたくさんありとても楽しかったです。



3 美味しかった食事

ステイ1日目の夜に、バーベキューをしました。家には広いバーベキュー専用のテラスがあります。ファザーに肉の焼き具合を聞かれたとき、よく焼いた肉が好きな私は、『ウェルダン』という言葉が出てこなかったため、『long time, long time』(長い時間)、



『more long, more long』(もっと長く)、
『brown, brown』(茶色に)、と説明しました。



(1枚230gありました)

2日目の昼には、ファザーとマザーと一緒にピザを焼きました。玄関の横にピザオーブン(ピザ窯)が置かれた部屋がありました。小麦粉をこね生地から作る本格的なピザです。好きな具をトッピングして、焼きたてを食べました。サクサクして美味しかったです。

V オージーキッズとの交流会



1月8日に、ゴールドコーストにある公園で、20人ほどのオーストラリアの子どもたちと交流会がありました。

バーベキューをしたり、日本の「だるまさんがころんだ」やバドミントンで遊んで、楽しい時間を過ごしました。オーストラリアの子どもたちは、明るく元気いっぱいでした。

オーストラリアの子どもたちは日本に興味があるらしく、たくさん質問をされました。

VI 海外研修を終えて

出発する前は不安でいっぱいでしたが、今は満足感と楽しかった思い出でいっぱいです。

自分の英会話は決して上手ではなかったと思いますが、研修の間は言葉で苦勞することはありませんでした。単語をつなげただけの時や、何回も聞き直した時もありました。でも、恥ずかしがらずに話をしてみれば案外コミュニケーションがとれることが分かりました。出発する前に考えていた「英語で会話が出来るか試してみる」という自分なりの目標は達成できたと思います。

また、コアラを抱いて写真を撮ったり、カンガルーにエサをやることもできました。コアラはぬいぐるみと違い、ズッシリ重く鋭い爪を持っていたので驚きました。

自分のテーマ「環境を守るための工夫」を考えるために、ごみの分別について調べましたが、今思い返してみると、少しゴミの分別にこだわり過ぎていたように思います。オーストラリアの人々、特に牧場で生活している人々は自然との関わりが深いはずで、ファザーやマザーの自然への想いや環境保護に対する考え方なども聞くことができたら、また別の工夫が思い浮かんだかもしれません。



この海外研修で得た体験は、今後必ず私の力となるはずで、この体験を単なる思い出として埋もれさせないよう、これからの学校生活に活かしていきたいと思っています。そして、何年か後、再びオーストラリアに行き、今回お世話になったホストファミリーに成長した自分を見て欲しいと思います。

オーストラリアで学んだこと

No.11 平和中学校 齊藤萌々

I はじめに

私がこの研修に参加したいと思ったのは、外国で英語の大切さを学びたいと考えたのがきっかけです。また、自分の視野も広がり、英語に対する意識も高くなると思いましたが、そして、自分が経験したことをより多くの人に伝えて、一人一人の意識が変われば、大仙市をよりよくすることにつながっていくと考えました。

II テーマ設定の理由

テーマ：自然環境を生かした生活の工夫がもっとできないだろうか？

私は、普段の生活で自然の恵みをもっと利用すれば、環境に優しく、快適に暮らせるのではないかと思いました。そして、自然環境に恵まれたオーストラリアでは、そのことについて何かヒントになることがあるのではないかと思い、このテーマにしました。

III 調べた内容

1 水について

出発前私は、インターネットでオーストラリアは水不足だということを知りました。実際私のホームステイ先では、節水をとっても心がけていました。

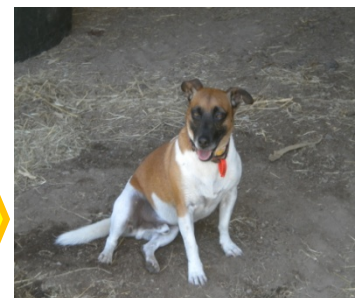
しかし、オーストラリアの節水の工夫は日本とは全く違いました。まず、シャワーを使うとき、私たちは「3分くらいでよろしく」と言われました。短いなと思いましたが、これが節水の工夫なんだと思いました。以前は、各家庭に砂時計が配られたこともあるそうです。

次に、お皿を洗うときです。台所には、シンクが二つあり、片方にぬるま湯、もう片方にお湯をためていました。そして、ぬるま湯の方に洗剤を入れていました。お皿を、まず洗剤を入れた方で洗い、それをお湯につけて洗い流しました。たいていは皿洗い機で洗うそうですが、このようにして洗う家庭もあるそうです。対照的に、日本では水を流しっぱなしにしながら洗うことが普通になっています。

2 生活について

(1) ごみの工夫

私たちは、食べ残しがあれば捨ててしまいます。しかし、私のステイ先では、その日のご飯が余ったら捨てるのではなく、犬の Dickie に食べさせていま



した。ホストマザーの Kathrynさんは、「Dickieはこれをいつも喜んで食べているんだよ」と言っていました。私は、そうすることによってごみが減り、地球にとっても優しいなと思いました。また、オーストラリアは以前、ごみの分別すらされない、ずさんな時期があったそうです。現在は分別ルールもでき、燃えるゴミ、プラスチック、缶などに分けているそうですが、日本よりは細かくはないそうです。しかし、オーストラリアの街並みは、ごみが落ちていることもなくとてもきれいでした。分別については日本の方が意識が高いと思いますが、ごみを捨てないということに関しては、オーストラリアの人々の方が意識が高いと思いました。

(2) 節電の工夫

私たちが、晚ご飯を食べにリビングへ行くと、台所以外の電気は全て消えていました。私たちが来たら点けてくれましたが、食べ終わり、自分たちの部屋に戻るとき、やはり消していました。庭で食べる時は、部屋の明かりをすべて消し、キャンドルを使っていました。また、オーストラリアでは、コンセントにスイッチがついています。コンセントプラグを差してもそのスイッチがオフになっていれば点かないので、無駄な電力を使いません。日本では、プラグを抜かないと電力をたくさん使ってしまいがちですが、オーストラリアではスイッチを押すだけで簡単に節電することができます。



IV まとめ

私がこの研修を通して学んだのは、オーストラリアの人々は、この大自然を一生守り続けたいという気持ちを強くもっていると感じたことです。

私のステイ先の Collas 家では、部屋にクーラーがあるのに、一切つけませんでした。その代わりに、窓を開け、風通しをよくしていました。それだけでも十分涼しく、無駄なエネルギーを一切使っていないので、とても自然に優しいと思います。また、オーストラリアでは、水はとても貴重ですから、節約できることはとことん節約し、水を大切にしていこうという人々の気持ちが強いと感じました。私たちの住んでいる日本では、水不足で困ってはいません。そのため、多くの人々にとって、水の出しっぱなしが普通になってきているように思います。今回私は、水のありがたさを感じることができました。電気に関しても、無駄な電力は使わないようにいろいろな工夫がほどこされていると思いました。

さらに、オーストラリアの道路や歩道には、一つもゴミが落ちていませんでした。日本では、たまにゴミが散らばっています。私は、オーストラリアの人々は、「ポイ捨てしない」という意識が身についていると思いました。

私は、このような気持ちを一人一人が持っているから、今のオーストラリアの自然があるのだと思います。実際私は、オーストラリアの空気は日本よりもきれいだと感じました。これは、オーストラリアの人々が、自然を大切にし、守り続けているからだだと思います。

私たちも一人一人が「自然を守る」ということを意識し、また、その自然をうまく利用できれば、よりよい大仙市を作ることができると思います。そして私は、大仙市をよりよくするばかりでなく、今問題になっている



「地球温暖化」を防ぐ第一歩となるのではないかと思います。

この研修は、私に自然の大切さを改めて教えてくれました。この研修で学んだことを、より多くの人に伝え、自分たちができることから始めたいと思います。

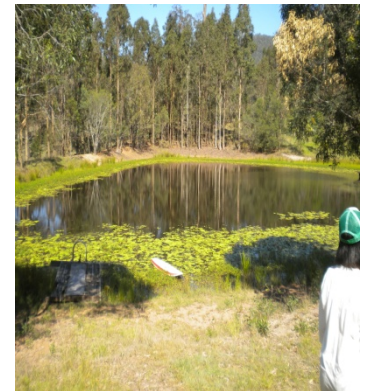
V エピソード

1 服が・・・

季節が夏のオーストラリアでは、老若男女問わず半袖短パンという服装の人が多くいました。海に近い場所を訪れたこともあり、中には上着を着ていない人や水着で歩いている人もいました。また、ほとんどの人が裸足で歩いていました。日本では考えられない服装の人が多かったのも、とても驚きました。

2 敷地が・・・

オーストラリアはとにかく敷地面積が広いです。私のステイ先も、入り口から家まで車で1分はかかりました。また、敷地内をドライブしたとき、大きな池を見ました。最初は敷地を出て森にでも入ったのかと思いましたが、家から近いし柵などもなかったのも、敷地内に池があるのだとわかり、みんなで驚いてしまいました。また、動物もたくさんいました。牛と馬がそれぞれ約10頭ずつ、アルパカが2頭いました。敷地面積も広く、動物もたくさんいるのでお世話するのが大変そうだなと思いました。実際エサをあげに行った時にも、かなりの距離を歩きました。



3 靴を・・・

ファームステイの初日、ホストファザーの Duncan さんが靴のまま家の中に入っていったので、少し抵抗がありました。私たちが真似してそのまま入りました。しかし Kathryn さんは靴を脱いで入っていました。どうしたらいいかわからないまま、3日間靴をはいて過ごしました。

VI ホストファミリー紹介



ホストファザーの Duncan さん



ホストマザーの Kathryn さん



二人ともすごく優しく、私たちにいろいろな経験をさせてくれました。動物に触らせてくれたり、オーストラリアの文化も教えてくれました。また、公園や動物と触れあえる場所にも連れて行ってくれました。私たちが作ったそうめんを一緒に箸を使って食べたりもしました。この3日間は本当に楽しく、充実していました。

Duncan さん、Kathryn さん、本当にありがとう!!!

VII 研修を終えて

私は、この派遣事業で、「自然」に対しての意識が変わりました。今私は、自然を守るために、ストーブの設定温度を低くしたり、必要のないときは電気をこまめに消すようにしています。これはとても小さなことですが、今の自分ができる、自然を守るための努力だと思っています。また、水も大切に使うようにしています。まだまだ自分のできることはあると思うので、これからも頑張っていきたいです。

また、「コミュニケーション」の大切さも学びました。言葉が全く通じない外国で、英語をうまく話せない私たちがまずできることは、コミュニケーションをとろうと試みることでした。英語でどう言っているかわからなくても、ホストファミリーの方はわかりやすく、私たちが知っていそうな単語を使って会話をしてくれました。また、私たちが一番最初に秋田の文化について話したときも、「これが有名なんだよ」というと、「すごくきれいだね!」と、必ず感想を言ってくれました。日本人は、あいづちしかない人が多いので、一言でも感想を言ってもらえるのは、すごく嬉しかったです。だから、私も初対面の人だけでなく、親しい人ともさらにたくさんコミュニケーションを取っていきたいと思います。

この一週間は、本当にあっという間でした。たくさんのお話を学び、経験することで、自分の生活などを考えるきっかけになりました。この経験を生かし、大仙市をよりよくするためにも、小さなことから頑張りたいです。また、たくさんの方が協力してくれたから、このようなすばらしい経験ができたと思います。これを無駄にせず、感謝の気持ちを自分の行動で示したいと思います。本当にありがとうございました。



オーストラリア海外研修を終えて

No.1 2 平和中学校 菅原未咲

I はじめに

私が、英語そして海外に興味をもったのには理由があります。海外からたまに帰って来る親戚の人が、私や家族みんなにその国のくらしや文化についての様々な事を教えてくれたのがきっかけです。そこで私は、英語を勉強し海外のくらしを知ることで、自分の視野がどんどん広がっていくのではないかと思いました。そして、実際に自分の目で見て感じて体験することで、これからの英語に対する関心と意欲がさらに高まると思い、この海外研修への参加を希望しました。

II テーマ設定の理由

私は研修のテーマを「自然保護につながる衣食住の工夫について」としました。

オーストラリアは世界で暮らしやすい国のベスト3にはいっていることを知り、オーストラリアと日本の衣食住の違いについて調べることで、オーストラリアの長所がわかるのではないかと考えました。そして、オーストラリアの長所を大仙市の自然保護にも生かせるのではないかともし、このテーマを設定しました。

III 調べた内容

① 衣食住について

「衣」について

オーストラリアの、衣服はそれほど日本と変わりはありませんが、日本よりも2サイズ大きく、例えば日本のLサイズがオーストラリアではSサイズであることが分かりました。

オーストラリアの夏は、常に水着とビーチサンダル姿があたりまえでした。しかし、一日の気温の変化が激しいので、朝から昼にかけてはとても暑いけれど、夜になると一気に温度が下がり、5℃ぐらいになるときもあるとのことでした。



～気づいたこと～

オーストラリアでは、暑いせいか多くの人がラフな服装で過ごしていました。

2「食」について

オーストラリアの食べ物はとても種類が多く、特にフルーツが豊富でした。

食べ物に関してオーストラリアの人が強く心掛けていることは、できるだけ生ごみを出さないことです。

そして、食べ物の輸入・輸出もさかんだそうです。日本にもたくさんのフルーツを輸出しています。

また、農家の人は国から手厚く保護されているそうです。オーストラリアの農業は「お金をもうけるビジネス」としてだけではなく、「国を支える大切な産業」として考えられています。食料自給率を安定して保つことで、どんなときでも輸入に頼らず自立できることを目標にしています。農家が減るとオーストラリアの将来が大変になると考え、農業を保護することに力を入れているようです。日本も見習える部分があるのではないかと感じました。



～気づいたこと～

食べ物をとても大事にしていました。日本では食べ残しをすぐに生ごみとして捨てることが多いけれど、オーストラリアでは生ごみをあまり出しません。食事のとき、食べることのできる量を皿に盛り、それは責任をもってきちんと食べ、それでも残ったものはたい肥や動物のえさとして活用していました。また、その日のうちに食べきれなかったものはバックに保存し、次の日の食事に出して手間を省いたり、残ったものを再利用して新しい料理を作るなど、節約や工夫をしていたのが印象的です。

3「住」について

住宅は、ほとんどクィーンズランダーと呼ばれる高床式の家でした。日本の家よりも高いところに部屋があるという印象です。土地が広いいためか日本のような2階建ての家はほとんど見あたりませんでした。

オーストラリアでは国民が環境問題について真剣



に考えています。特に自然を大切にしようという心がけから、リサイクルに強く力を入れていて、ゴミは全て分別し、生ゴミは肥料にしていました。オーストラリアの人は次のようなことに気をつけ、エコな生活を送っています。

- ・木を育てる。
- ・木を切らない。
- ・川を汚さない。
- ・汚れた水は川に流さないで地面にしみ込ませる。

これらのことはわたしたちも見習う必要があると思います。さらにオーストラリアの多くの家庭では、ソーラーパネル<太陽電池>を使っています。これは国が補助金を出して普及を図っているそうです。日本にも普及してきていますが、まだオーストラリアほどではない気がします。

～気づいたこと～

水をととても大切にし、無駄を省きながら生活を送っていることがとても印象に残っています。

調べたことから

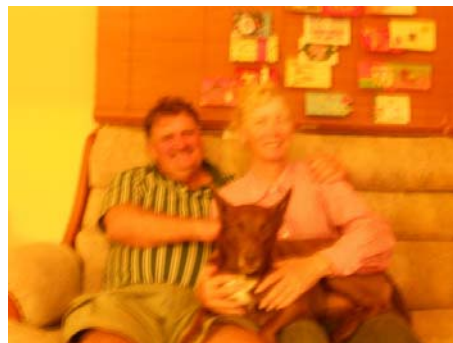
3日間ファームステイをして、オーストラリアの生活は自然を汚さない、環境にやさしい生活だったと感じました。生活を共にすることで自然を大切にしていることを知り、本当に感心しました。出来ることから一つずつ実行していくことで、こんなにも暮らしやすい生活ができるのだと感じました。日本人も、食べ物のありがたみをもっと考えながら、日々の生活を送っていければ、もっとよい暮らし方ができると思います。そしてよい環境のなかで生活していくためにも、環境問題についていっそう意識を高めていくことが大切だと感じました。小さなことでも一人一人が実践することで、大仙市はよりよい環境づくりに励んでいくことができると思います。

Ⅳエピソード

ファームステイでの出来事

ファームステイ先の家族は仲がよく、明るい家庭でした。

お父さんのジョンは明るくておもしろい、とても気さくな方でした。そして、私たちの目を見て話しかけ、必ずほほえんでくれる心の優しい方でした。食に関しては、何枚ものステーキを食べるほどの大食漢で、びっくりしました。





お母さんのリサは、サバサバしているけれど相手のことをしっかりと考え、自分の意志を持って動いている立派な人でした。よく車の中でノリノリに歌を歌っていたのが印象的です。歌が大好きな方で、夜には一緒に歌ったりもしました。

愛犬のテジューは、とてもリサとジョンになつていました。時間がたつにつれて、私たちにもすごくなつてくれて、たくさん遊

びました。特に黒い棒で遊ぶのが好きで、人の言うことをちゃんと聞かしくい犬でした。テジューの他にも馬のメアリー、アリー、レリーがいて、私たちがファームステイに行った日にメアリーの子供、ポニーが生まれました。

ふたりは日本の文化の話に興味を持ってくれて、私たちが日本から持参したお土産を渡すととても喜んでくれました。プレゼントした習字の半紙と筆で、自分の名前を書いてくれたりもしました。

ホストファミリーと過ごした四日間は本当に楽しく、充実した毎日を送ることができました。慣れない英語で相手に物事を伝えるのは難しいことでしたが、一緒にいることで相手の伝えたいことがだんだん理解できるようになり、リスニングの力がついてきたと感じました。緊張気味だった私たちを、ジョンとリサが明るく温かく受け入れてくれたことで、リラックスすることができました。本当に感謝しています。

V 海外研修を終えて

私は、この海外派遣事業を通して、オーストラリアの人々は日頃からエコに関して高い意識をもって生活していると感じました。さらに、水を非常に大切にしていることもわかりました。私が一番感心したことは、家族みんなでエコに取り組んでいるという点です。このようなことを、わたしたちも見習いたいと思います。

私はこの海外派遣事業で学んだことを生かし、多くの人に環境問題について考えることの大切さを伝えたいと思います。そのためには考えているだけではなく行動に移し、少しでも大仙市の自然保護に貢献していきたいと思います。

最後に、この派遣事業に参加するにあたり、たくさんの方々の協力をいただきました。不安でいっぱいだった私を後押ししてくれた先生方、そして支えてくれた家族に心から感謝しています。

私は今回の研修に参加したことで、英語を勉強したいという意欲がますます高まりました。実際に生で英語を聞いて会話をするのは苦勞しましたが、コミュニケーションをとるのは楽しいことでした。英語の勉強を続けていくことで、多くの外国の人とコミュニケーションをとれるようになりたいと思います。

Australiaの農業について

NO.13 協和中学校 加藤美帆

I はじめに

今回この事業に参加した理由は、昨年デンマークから私の家にホームステイに来た方がきっかけです。英語を習いたての私は会話ができませんでした。多少は学習を重ねた今、オーストラリアに行って自分の持っている知識でどれだけ英語が通用するのか試してきたかったからです。

今回この大仙市立中学生海外派遣事業に参加させていただき大変貴重な経験をさせてもらいました。日本とは異なる文化、また生活について学ぶことができました。

II テーマ設定の理由

今回の私のテーマは「オーストラリアの農業について」です。そこからさらに「大仙市で農業を盛んにするにはどうすればよいか」ということも考えてみました。このテーマにした理由は、現在大仙市で農業を行っている人はほとんどが高齢者で、若い人が減少してきていますが、農業を盛んにすることによって、これから農業に取り組む若者が増加していけばいいなと思ったからです。

III 調べた内容

1 オーストラリアの農業の種類・特徴について

(1) 畑作

私の見た畑では、少しのスペースにぎっしり作物を植えていました。ファームステイ先のボーデザート周辺は日本とは異なり一年中暖かい気候なので、例えばトマトを植えておくと一年中実がなります。だからあまり世話をしなくても大丈夫なようです。とても簡単ですね。



(2) 牧畜業

オーストラリアは広大な土地を生かした牧畜業がとても盛んでした。私は3日間のファームステイで家畜の世話をしてきました。農家の方が所有している土地は、日本では考えられないほど広く、自分の敷地内を移動するときは車で移動しなければいけませんでした。

私は馬と牛の世話をしてきました。家畜たちは草を食べて生活しています。その草はもともと生えているもので、人間はあまりかまわなくてもよいそうです。しかし、けがや病気をしたら自分で治さなければいけないのでとても大変そうでした。家畜が死んでしまうと大きな損失になるので、毎日観察しなくてはならず、休みをとることがとても難しそうでした。

畑いっぱい作物が栽培されていました。

怪我をした馬に手当をしている様子です。

2 牧畜業にはどんな土地、気候が適しているのか

(1) 土地について

土地は広くて牧草が生えているところが適していると思いました。大仙市にも広大な土地があるので、牧畜業が出来そうな気がします。牧草は田んぼでも作れるので、家畜たちの食糧も確保できると思います。

(2) 気候について

私がファームステイを体験させていただいたところは、年間気温が最高40度程度で、最低でも8度程度だと聞きました。ファームステイ先の方に「雪が降っても牧畜業はできますか?」と聞いたところ「私が飼育しているところではできない」とおっしゃっていました。なぜかと聞いたところ、雪が降れば小屋がないとえさをあたえ睡眠をとることができないからおっしゃっていました。寒いところではそれなりの工夫をしないと牧畜業は難しいと思いました。

ここで調べてきたことを表でまとめてみました。

	畑作	農牧業	果実
気候	温暖	温暖、寒冷 OK	温暖
土地	狭くても OK	広い	広い
費用	少し高め	高い	少し高め



一部の牛がいるところ
です。ここには20頭
近いです。

3 まとめ

ステイ先の畑を見る限りでは、畑作は日本のほうが技術は進歩していると思いました。その技術を生かして畑作に力を入れていくといいと思いました。さらに農業を会社組織にしていけばいいと思います。給料制にして経済的にも安定していることを強調していくことで注目も集まると思います。現在若い方たちの就職する場所が減り困っています。そういう方を受け入れていくことで、過疎化が進む大仙市の集落も、少子化を食い止められる可能性があるかもしれません。安定した収入を得られる農業の基盤をつくっていただけるように、行政にも力をいれてほしいと思います。

IV ホームステイ先での出来事

一日目



初日は大きなスーパーマーケットに行きました。野菜や肉のほとんどがオーストラリア産のものでした。これは手のひら位の大きなパプリカです。日本ではなかなか見かけないものを見ることができました。

二日目

二日目は子牛にミルクを与える仕事をしました。子牛なのに結構押す力が強く大変でした。初めての経験で緊張したけれど、とても可愛い子牛で楽しかったです。



三日目



三日目は4WD車で家の敷地内の様子を見て回りました。とても広いので全部見ることはできませんでした。広い敷地の中で車を自由に走らせるなど、日本では体験できないことが楽しめました。

V オーストラリアで発見したこと

(気づいたこと)

- ・日本のメーカーの車が多い(トヨタ、ホンダ、スズキ、ミツビシ、スバル…)
- 走っている車を観察していると、通行している約8割の車が日本のメーカーの車でした。
- ・一つの商品の種類が豊富



日本の商品はこの半分位?

VI 研修を終えて

オーストラリアは広大な大自然がある豊かな土地だと改めて感じる事ができました。私達が住んでいる大仙市も広大な土地に恵まれていると思います。オーストラリアと異なるところは、大仙市は綺麗な水にも恵まれているということです。私がファームステイした家では水がとても少ないので、節約して大事に使用していました。水に恵まれていて本当に良かったなと思いました。そして大仙市も本当に豊かなところだと改めて感じました。

この研修を終えてたくさんの情報や知識を得ることができました。携わって下さった方々に感謝しながら、今後もより良い大仙市にしていけるために日々努めていきたいと思っています。

支援して下さいました方々本当にありがとうございました。



Thank you

オーストラリア研修

No. 14 西仙北東中学校 伊藤大河

I はじめに

僕が、オーストラリアに行きたいと思ったのには理由があります。

それは、自分が勉強した英語が海外でどれだけ通じるのか知りたい、また、オーストラリアに行くことによって、視野が広がるのではないかと思ったからです。そして、オーストラリアで学んできたことが、今後の成長に役立つのではないかと思ったからです。

事前学習会では、最初ほかの学校の人とうまく話すことができなくて心配でしたが、学習会や説明会を重ねるうちに仲良くなることができました。学習会では入国カードを書いたり、入国の時に使う英語を勉強したりして、少しずつ出発の日が近づいていることを実感しました。

II テーマ設定の理由 「みんながスポーツを楽しむためには」

僕は、「みんながスポーツを楽しむためには」というテーマを設定しました。

理由は、スポーツが嫌いな人や苦手な人が、僕が調べた内容を知って、スポーツを好きになってくれるかもしれない、と思ったからです。さらにスポーツを好きになった人が有名な選手になって、この大仙市からたくさんの有名選手が輩出されたら素晴らしい、と考えました。

III 調べた内容

オーストラリアのスポーツについて

まず僕は、オーストラリアのスポーツについて調べようと思いました。

クリケット・・・クリケットとは野球に似ているスポーツで、ピッチャーの投げ方は肘を曲げられず、バウンドで投げなければいけません。投げるときにピッチャーは助走をつけてもいいそうです。そしてバッターは長さ1メートル、幅10センチのバットを使います。膝から下で打たなければならないのですが、360度どの方角に打ってもいいそうです。打ったバッターは、ホームとベースを往復して、その往復した分だけ点数になるというスポーツです。

オーストラリアではラグビーやサッカー、テニスなどがメジャーなスポーツでした。オーストラリアの人が野球を知らないのはショックでした。

ファームスティ先のポールさんは、「見るならクリケット、やるならサッカー」と言っていました。

IV テーマのまとめ

僕は、オーストラリアに行きクリケットというスポーツを実際にやってみてわかったことがありました。それは、ミスをしていても責めたりせず、いいプレーをしたらそれを褒めると、プレーをしている人や、その周りの人も楽しくスポーツをすることができるということです。

また、スポーツは面白いからこそ今まで続けてきたのだと思います。スポーツの楽しさはやってみないとわからないものだと思います。クリケットを是非この秋田にも広めてみたいものです。

V 研修日記

〈一日目〉

秋田空港から羽田、成田を經由し、ゴールドコースト空港に着きました。

移動の時間は他の学校の人達と話をして仲良くなることができました。僕は、飛行機で「機内食」というものを食べたことがなかったので、どんなものかとワクワクしました。食べてみると思っていたよりもおいしかったです。



〈二日目〉

ゴールドコーストに着いたときは、何も言葉が出ませんでした。それは、見るものすべての表示が英語で書かれていて、日本では見ることもない光景だったからです。そしてやはりオーストラリアは暑かったです。

空港では入国審査をしました。僕は心の中で「無事に通過できるだろうか」と心配でしたが、何ごともなく終わって安心しました。

ファームスティ先では、うまく会話ができるか心配でしたが、ホストファザーのポールさんが、ジェスチャーや擬音語を交えて話してくれたので、どうにか理解することができました。

昼食はBBQでした。オーストラリアに来ていきなりBBQが食べられるとは思っていなかったのうれしく思いました。

午後は釣りをしましたが、釣れなかったので残念でした。

そして夕食もBBQでした。「オーストラリアの人はよく肉を食べるなあ。」と思いました。この日の夜は思ったよりも涼しかったので、すぐ眠ることができました。

〈三日目〉

この日はコアラを飼育している場所に連れて行ってもらいました。公園の中を散策し、最初に出会った動物はワラビーでした。見つけたときは、カンガルーかと思いましたが、ポールさんが「ワラビーだ」と言っていたので、どうやって見分けをつけるのか気になりました。

初めて見たコアラは、思っていたよりも小さく、そして魅力的でした。寝ている姿もとてもかわいいと思いました。

帰ってからは鶏小屋を作り直す手伝いをしました。

ポールさんと一緒に材料を運んだり、工具を使って材料を切ったりしました。





〈四日目〉

この日は朝から鶏小屋を作る作業の続きをしました。昨日のうちに進めておいたのですぐに完成できました。出来た鶏小屋に鶏を運ぶ手伝いもしました。

夕食には僕たちが稲庭うどんを作りました。調理は大変でしたが、どうにか作ることが出来ました。ポールさんは「おいしい」と言ってくれました。

〈五日目〉

この日はポールさん達とお別れです。ポールさん達のおかげで僕の英語力が上がったと思います。「ポールさんありがとう」

ホストファミリーと別れたあとは、全員で世界遺産のグリーンマウンテンに行きました。そこで見たアルパカの毛は、とてもさわり心地がよかったです。

野鳥の餌付けをしたときには、七面鳥も寄ってきました。インコが頭に止まって最初は驚いてしまいましたが、さらに5, 6羽が頭や腕にも止まり、にぎやかな餌やりを楽しみました。

その次は、グリーンマウンテンの散策をしました。とにかく緑がいっぱい、とてもリラックスすることができました。グリーンマウンテンに落ちている、葉っぱや枝を持ち帰ってはいけなると聞き、「世界遺産として、大切に保護されているのだな」と改めて感じました。

午後はカランビンワイルドパークで動物を見ました。特に面白かったのはカンガルーの放し飼いです。まったく警戒心のなさそうなカンガルーは、自由に触ることもできました。

オーストラリアの原住民のアボリジニショーも見ました。アボリジニショーでは、昔ながらの楽器を使っての演奏や、その演奏に合わせたダンスがありました。カンガルーのダンスというのが強く印象に残っています。

この日は、サーファーズパラダイスホテルに泊まりました。



〈六日目〉

この日は、クルーズボートに乗ってカニをとったり、ペリカンに餌をやったりしました。他にも、ヤビーという魚の餌になるものをもって釣り体験もしました。

午後からは、オージーキッズとの交流会がありました。オーストラリアの子供たちはとてもフレンドリーで、一緒にクリケットを楽しんだり食事をしたりもしました。

〈七日目〉

ゴールドコースト空港から、JQ11便で成田空港に着きました。乗るのも2回目なのでだいぶ慣れてゆっくりと時間を過ごすことができました。

〈八日目〉

成田に着いたとき、遠くに雪が見えたので「日本に帰って来た」と感じました。

成田空港からはバスに乗って秋田に向かいました。バスではあまり眠ることができませんでした。



VI 海外研修を終えて

僕は、「みんながスポーツを楽しむためには」というテーマを持って今回の研修に臨みました。直接経験出来たスポーツはクリケットだけでしたが、研修期間中に触れあうことができたオーストラリアの人たちは、スポーツ以外の場面でも、「良いところを見つけてほめる」「間違っても頑張ったことをほめて励ます」ことを当たり前のこととして行っていました。こういう前向きな姿勢が、みんながスポーツを楽しむことにつながっていくのではないかと思います。まずは自分がそうできるように心がけて生活していきたいです。

また、もう一つオーストラリア研修を経験して思ったことは、「言葉が通じる」というのはすばらしいということです。それは、自分の知っている英語を使って相手に伝えられた時、とてもうれしかったからです。これからは、もっと英語を勉強して、また今度行ったときには英語をたくさん話し、もっと英語を楽しみたいと思います。

僕は今まで、いつも人の意見に合わせるような性格でしたが、オーストラリアで英語を話しているうちに、自分の意見に自信を持つことができました。それは、英語の質問に答えるにはYESかNOしかないので、自分の意見がはっきりしていないといけなかったからです。これからの学校生活でも、自分の意見をはっきりと言えようようにしたいと思います。



オーストラリアで学んだ事

No.15 西仙北東中学校 田口咲月

私はこのオーストラリアへの派遣事業に参加する事を、母に薦めてもらいました。話を聞いたとき、すぐに「絶対に行きたい！」と思いました。言葉の通じない国で過ごすのは不安もありましたが、今まで学習してきた英語が海外でどこまで通用するのかを試してみたかったからです。「20人しか行けない。」と聞いた時はとても緊張しました。だから、行く事が決まった時はとても嬉しかったです。

事前学習会ではオーストラリア独特の言葉、入国カードの書き方、お金の数え方などたくさんの事を学びました。

研修日記

[1日目]

午後3時に秋田空港を出発して、羽田空港に着きました。そこから成田空港へ移動し、JQ12に乗りオーストラリアのゴールドコーストへ向かいました。1日目は飛行機内で就寝になりましたが、座席が直角だったので安眠はできませんでした。

[2日目]

朝起きたらもうオーストラリア上空でした。ゴールドコースト空港に着き、入国手続き後、ボーデザート地区へ移動しました。

その後ホストファミリーと対面式をしました。私のホストファミリーは「Kimi」という女性の方でした。とても元気な人ですぐに仲良くなれました。ステイ先に着いてから、私たちは庭にあるトランポリンやプールで遊びました。そのおかげで一緒に行った仲間たちとも仲良くなれました。



Kimiの家にあったプール



庭にあった巨大トランポリン
みんなと一緒に遊びました。

[3日目]

朝から牛・馬・鶏の餌やりをしました。その後、近くの牧場に牛の散歩を手伝いに行きました。いろいろな模様の牛がいる中に、真っ白な牛を見つけて驚きました。

昼食は私たちがお好み焼きを作りました。4枚作ってそれぞれを4等分し、みんなで分け合いました。とてもよく出来、Kimiも「美味しい」と言ってくれました。

夕方にはKimiと一緒に車で放牧場の見回りに行きました。放牧範囲が広く牛も馬ものびのびと生活しているように見えました。しかし、範囲が広すぎて動物たちを見失ってしまうこともあるそうです。



[4日目]

この日は牛の鳴き声で目覚めました。牧場でしか味わえない、いい目覚めでした。

朝、動物たちに餌やりをした後、牛の移動を手伝いました。飼い犬のグリスとティクが吠えて牛たちを誘導しているところを見て「かっこいい」と思いました。



牛に吠えるグリス



牛を怖がるティク

午後はKimiと一緒にスコーンを作りました。初めて作ったので形は変になってしまいましたが、味は良くできたと思います。

夕方の見回り後、Kimiが牛のいない放牧場に連れて行ってきて、そこで車を自由に走らせました。「オーストラリアでは17歳から運転免許がとれる」と教えてもらい驚きました。

[5日目]

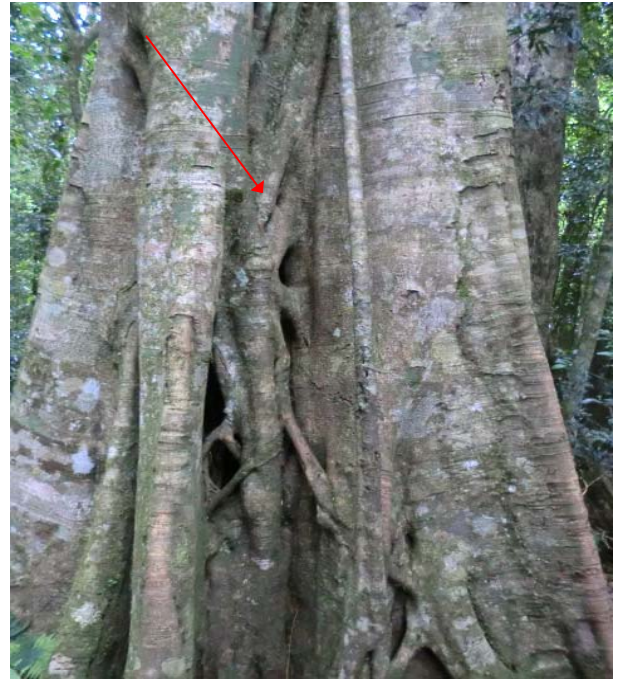
朝、Kimiとお別れしました。楽しい思い出が多く、もっと一緒にいたいと思いました。

バスでボーテザート地区を出発し、アルパカ牧場へ向かいました。アルパカは大人しく、とてもかわいかったです。

次は世界自然遺産に登録されている、グリーンマウンテンに行きました。そこでは野鳥に餌付けができるエリアがありました。餌を手にとると野鳥が一斉にやってきて

手を突つきながら餌を食べていました。

いよいよグリーンマウンテンの森の中に入ると、様々な大きさの木がありました。木が多すぎて、すべての植物にまんべんなく太陽の光が十分に届かないからです。森にはいろいろな種類の木があり、散策を楽しみました。



これは絞め殺しのイチジクの木です。

右の写真ではまだ細いのですが、左の写真ではたくさん養分を吸って太くなっています。

次にカランビンワイルドパークへ行きました。そこにはコアラやカンガルー、ワニなどの動物がいました。カンガルーには触ることができました。

[6日目]

クルーズボートに乗って野生のペリカンに餌付けをしました。潮風がとても気持ちよかったです。その後、みんなで釣りをしましたが1匹も釣れず残念でした。

昼は公園でオージーキッズとの交流会をしました。一緒に昼食を食べたり、ダンスを踊ったりしました。オーストラリアに友達ができ嬉しく思いました。

夕食は各自でとることになっていたもので、私は美帆さん、有紗さん、萌々さんと日本食のレストランで食べました。久しぶりの日本食は特別おいしく感じました。

[7日目]

少し寂しい気もしながらも出国手続きをし、オーストラリアを旅立ちました。

成田空港に着くと夕方6時でした。そこから10時間バスに乗って秋田へ向かいました。

[8日目]

大仙市役所に着いた時はクタクタに疲れていましたが、家族の顔を見た時はホッとしました。今回のことはとてもいい体験になりました。

研究テーマ

『地球温暖化を止めるには どのようなことができるだろうか』

私は、今、世界的な問題となっている「地球温暖化」をどのようにして止めることができるのか、オーストラリアはどんな対策をとっているのかを調べようと考えました。

* 節水 *

オーストラリアは元々水が少ないので、家で雨水をろ過して生活に使っています。そのためみんな節水を心がけています。入浴時間は1人3～5分と決まっていたり、食器はシンクでため洗いをしたりと工夫して節水しています。

* 発電・節電 *

日本は主に原子力や火力で発電をしています。それに比べてオーストラリアは太陽の熱や風力など、自然の力を使って発電しています。これは地球に優しい方法だと思っています。

そしてオーストラリアでは、夏でもエアコン・扇風機をなるべくつけません。もちろん暑いのですが、窓から風を取りこむことで我慢しています。これは日本も見習うべきところだと思います。東日本大震災の影響で、今年の夏も節電が必要となると思います。エアコン・扇風機の使い方を工夫して、節電に協力したいと思います。

まとめ

オーストラリアでは、いろいろなエコ活動が行われているのが分かりました。その反面買い物の時レジ袋を大量に使用することもあるようです。それに比べて日本はエコバッグを使用している人が多いので、その部分では日本の方がより良い方法だと思いました。

これからはオーストラリアと日本のそれぞれ良い部分を取り入れ、より良いエコ活動を実践していきたいと思いました。

日本とは全く違う環境で過ごし、オーストラリアの良い点・日本の良い点両方を見つけることができました。この発見をこれからの学校生活に取り入れ、学校の活性化に協力していきたいと思います。

この機会を与えてくださった教育委員会のみなさん・先生方・家族に感謝します。ありがとうございます。

オーストラリアで学んだこと

No.16 南外中学校 鈴木奈津美

I 参加するにあたって

私には兄がいます。数年前兄もこの海外研修に参加し、たくさんの土産話と珍しいお土産を持って帰って来ました。それを聞いて、「私も絶対行きたい！」という強い思いを抱いていたので、中学校に入る前からこの研修に参加するのが私の夢でした。

でも、参加するにあたって、自分の英語が海外で本当に通じるものなのか、疑問でした。さらに、各校から来た仲間達とも、学習会ではなんとなく壁を感じてしまっていたため、オーストラリアに行ってからちゃんとみんなと仲良くできるのだろうか、小さな不安がたくさんありました。しかし、実際に行ってみるとどうでしょう！ とても楽しい1週間が私を待っていてくれました。

II テーマについて

「自然環境を今のまま保つためにはどうしたらよいか？」

1. テーマ設定の理由

テーマを決めるとき、まず初めに浮かんできたのが「自然」でした。自然は、私たちのごく身近にあり、なくてはならないものだからです。ふと、近年の自宅近くの「自然」について考えてみました。すると、小さい頃にあったはずの小さなため池や、家のすぐそばにあった木々がなくなっていることに気づきました。少し前までは蛍が見られた川近くの道も、今では舗装されてしまい、生き物もいなくなってきました。

この現実気づかされたとき、私は素直に、「どうにかしないといけないのではないか？」と思いました。オーストラリアは極度の乾燥地帯で日照時間も日本の倍以上です。日本とは自然環境や生活環境が全く違います。でも、そこから何か見出せるものがあるのではないかと思います、このテーマにしました。

2. 調べた内容

(1) 街に生えている緑(樹木)の量

実際にオーストラリアで街を眺めながら市内散策していると、あちらこちらに南国特有の木がたくさん植えてあり、東京の街と緑の量はほとんど変わらないのではと思いました。

(2) 森林の面積の変化

しかし、国土の森林率をインターネットで調べて比べてみると、衝撃的でした。

オーストラリアの森林率 → 約19%

日本の森林率 → 約66%

なお、オーストラリアでは激しい干ばつと森林火災によって、2000年以降、森林の消失がさらに加速しているそうです。

(3) ホストファミリーへの質問

お世話になったホストファミリーに「オーストラリアの自然についてどう思っていますか？」と聞いてみました。すると、ホストファミリーは次のように書いてくれました。

“Dry land

It doesn't always rain. Water makes trees grow tall and narrow and have hard wood in Australia. Rain only comes in sunny warm weather so it's green unless there's hot sun and no rain falls. Then the grass and trees turn brown quickly. There is more water and moisture in the mountains so there are more trees.”



『乾燥した島』

雨はいつも降るわけではありません。水はオーストラリアの木を高く、細くそして、堅く育てます。雨は晴れた暖かい気候のときだけに降ります。熱い太陽と雨が降らなければ、緑はありません。草木はすぐに茶色に枯れてしまいます。山には湿気や水分があるので、木が多く育っています。』

私は英語を少しは話せるものの、もちろん完璧というわけではないので、兄や母の協力もあって、このように翻訳することができました。

ファームステイ先では、家畜に生ごみ（スイカの皮など）を与えたり、肉の余ったところは飼っている犬にあげたりしていました。また、オーストラリアで見聞きしてきたことだけでなく、帰ってきてからおみやげを注意深く見たときも、値札の裏に“**AFTER USE**”と書かれていて、再利用の方法などが事細かく印刷されていました。



3. まとめ

オーストラリア全体の国土森林率は低いのですが、街には樹木が所々に見られ、ファームステイ先には緑があふれていました。ホストファミリーはできる限りの食材を自分たちが作ったもので賄っていました。たぶん、周りのファームも同様ではないかと思います。ほぼ自給自足、と言えるのではないのでしょうか。

日本では、生活する上で「自然」をあまり意識せずに過ごしている人が多いと思います。しかし、オーストラリアの人々は違いました。一人一人が節水を心がけ、生ごみは動物たちに与え、使い終わったペットボトルは何か他の使い道がないか探すなど、リサイクルを意識して、自分たちの住んでいる土地のことを十分に理解している生活をしていました。

そんなオーストラリアの生活を見て、一人一人が住んでいる環境をよく理解し、その上で自分のできることを見つけ実行することが大切だと思いました。よく、テレビやポスターなどで「できることからはじめよう」といったキャッチコピーを目にします。もちろんすでに何か行動を起こしている人もいるのかもしれませんが、何もしていないという人の方が多いような気がします。私もその一人です。

まずは大仙市から、環境について一人一人が少しずつでも考えていくこと。それが、秋田県、そして日本の自然を守っていくことに繋がるのではないかと思います。

Ⅲ エピソード

1) ファームステイ先で！ 家族は この5人(?)でした。



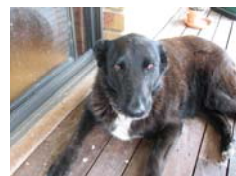
- ・マイケル … ハンサムで紳士的な人でした。
- ・ローリー … 優しく、話の内容を私達が理解できないときは、さらに易しい英語に直して話してくれたりもしました。

たまにマイケルとローリーがふざけあっていたりしているところを見て、『私も将来、こんな夫婦になりたいな』と思いました。



- ・ペッパー&スクーター
2匹は姉妹でした。たまにけんかしたり、追いかっこをしたり、じゃれあったりして遊んでいました。2匹は牛が柵に近づいてきたとき、追い払って柵に近づかせないようにするのが仕事のような感じでした。

- ・ルーシー … お年寄りのばあちゃん、という感じの女の子でした。彼女は特に仕事をするわけでもなく、ずっとローリーの後ろにくっついていました。



1日目 1月4日

この日は、ホストファミリーのお宅に行く前に「ブーナ」という小さな町に寄って、食材などを買いしました。到着後、みんなで昼食を作りました。右の写真にあるサラダと、チーズとハムとトマトをパンにはさんだハンバーガーを食べました。私はこういうさっぱりしたものが大好きなので、おいしかったです。

この後、馬を触ったり、畑で唐辛子とジャガイモを採ったりしました。

夕方、家の周りをぶらぶら散策した後、4DW車に乗って敷地内を時間が許す限り（実際はそんなに時間はなかったけれども）ドライブしました。



この日の夕食は大きなステーキでした。外で犬たちが羨ましそうに見ていました。左の写真のジャガイモは、この日畑で採れたものです。野菜嫌いの私でも食べられるくらい甘かったです。

2日目 1月5日

この日は午前中、ローリーとマイケルに習字を教えました。ローリーは左手で筆を握って頑張って「の」を書いていました。「の」という字の形が気に入ったらしく、上手に書けていました。

午後、ローリーが外出したので、私たちはマイケルと一緒に鶏小屋の周りの木を伐りに行きました。何度も同じ作業をしてけっこう疲れました。

夕方、ローリーが家に帰ってきて「カンガルーがいたわ」と言って、車で見に連れて行ってくれました。初めて生でカンガルーを見ましたが、背筋をぴんと伸ばしている姿がかわいかったです。

そのあと、また4WD車に乗って今度は牛を見に行きました。目前には牛、牛、牛。日本ではなかなか見ることができない素晴らしい風景でした。



夜は、お昼からいろいろと準備していた、ピザを食べました！

右の写真は、私がトッピングしたピザです。我ながら上手にできたと思います。

この日の夜、日本文化の紹介と、自分の家族について、それぞれマイケルとローリーに話しました。



3日目 1月6日

午前中、牧場内にいろいろな木を植えました。5、6本植えるだけでもかなり疲れたので、「どうしてこの広い農場をマイケルとローリーは2人だけでやっていけるんだろう」と、二人のパワーに驚きました。

作業が終わった後、2人に折り紙を教えました。ローリーは器用で、着物やつるを上手に折っていました。

午後は乗馬をしたり、馬にブラシがけをして過ごしました。夕方には、パーティーのために多くの人が集まってきました。その中の、エリーという女の子と日本文化についていろいろ話しました。エリーは日本のアニメが大好きでした。面白い人で、いつまで一緒にいても飽きませんでした。

4日目 1月7日

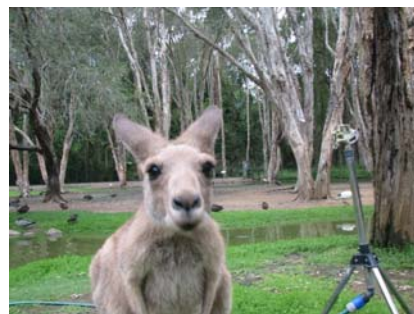
朝にホストファミリーとお別れしました。

“I don't want to go.”と言ったら、ローリーが喜んでくれました。別れはとても悲しかったです。

この日の午前中は、アルパカ牧場や、世界遺産のグリーンマウンテンなどに行きました。グリーンマウンテンのつり橋は怖かったけれど、面白かったです。森の中には、しめ殺しの木という木がありま

した。自然界もそうそうやさしくはないようです。

午後からは、動物園に行き、コアラを抱っこして写真撮影をしたり、カンガルーに触ったり、ワニやカラフルな野鳥などの、いろいろな動物を見ました。



5日目 1月8日

この日はクルーズボートで無人島に行きました。船上ではペリカンに餌付けもしました。無人島では「ヤビー」という小さいエビを獲り、船に戻ってからそのヤビーを使って釣りをしました。けれど、全然釣れなくて残念に思いました。

陸に戻ってからは、海のそばでオージーキッズと交流をしました。一緒にダンスをしたり、歌を歌って遊びました。オーストラリアの子供たちはとてもパワフルで、元気いっぱいでした。

そのあとで、ゴールドコーストの海に行きました。私は友達と一緒に砂浜に「青春フォーエバー」と書きました。

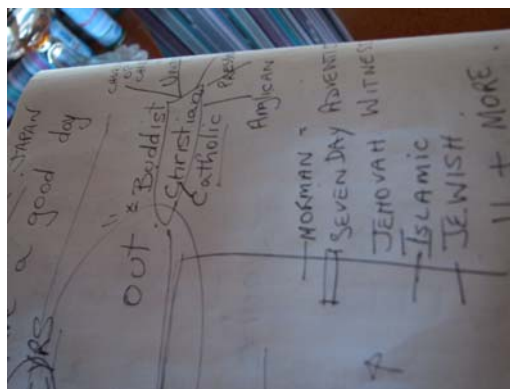
夕方には、市内散策をしました。おみやげ屋さんなどでたくさん買い物をしました。日本人店員のいる店もあり、とても居心地がよかったです。日本にもある「31 サーティーワン」というアイスクリームショップを街で見つけたので入ってみました。日本にはないメニューが並んでいて楽しかったです。とても充実した1日でした。



2) 興味深い話

「日本の学校ではみんな一緒に遊ぶの？」と、ホームステイ先のローリーに質問されました。「はい」と私は答えました。なぜそんなことを聞いたのかというと、オーストラリアの学校では宗教の事情があり、みんな一緒に遊ぶことはできないことがあるからだそうです。

しかし、聖カトリック学校という学校では、宗教も関係なくみんな一緒に遊べるそうです。とても興味深い話でした。



IV 研修を終えて

今回の研修は初めての海外ということで、緊張していました。しかし、英語は今までやってきたことを少し応用すれば相手に伝わり、一緒に行った人たちとも友達になることができ、楽しく7日間を過ごすことができました。

英語はとにかくたくさんしゃべってみるのが一番なんだと分かりました。特に“I like it.”という言葉は使ってみるべきものだと実感しました。また、オーストラリアの人たちはみんな優しくかったです。こちらが自然に笑顔になるくらい、誰もが明るい笑顔で応対してくれました。いろいろな場面で慌ててしまう私のことも”Don't Worry.”と言って待っていてくれました。

いつもと違う環境、文化も言葉も違う人たち。そんな中で過ごした1週間には、新しい発見や、新しい出会いが数えきれないほどありました。今回の研修で新しい自分を見つけることもできたし、ひとまわり成長できたような気がします。

この研修に参加するにあたり、家族や先生方、友達にたくさんお世話になりました。本当に感謝しています。今回の体験をこれからの生活や、様々な場面に生かしていきたいです。

オーストラリアでの5日間

NO. 17 南外中学校 八嶋美咲

I はじめに・テーマ設定の理由

研修テーマ「お年寄りに少しでも快適に過ごしてもらうにはどんなことができるだろうか？」

今、日本は、そして私たちの住む秋田県は少子高齢化が進み、様々な問題が起きています。そんな日本の中で、お年寄りの方々に少しでも快適に過ごしてもらうにはどんなことができるのだろうかと思い、このテーマを設定して海外研修に臨みました。

II バリアフリーの街

ファームステイ先のキャサリンさんや現地ガイドの朋子さんに伺ったとおり、オーストラリアはバリアフリー化が進んでいると感じました。

ゴールドコーストのホテルや空港、施設のいたるところにバリアフリー化が見られ、道路から海岸に降りる道には、階段の隣に緩やかなスロープがつけられていました。



日本ではあまり意識して見たことはありませんでしたが、オーストラリアの街に比べて日本のバリアフリーはまだ充分ではないと思いました。

車椅子で生活をする人や足腰の弱い人が多い、少子高齢化が進む秋田県で、バリアフリー化は大きな課題なのではないかと私は思います。

III 少子高齢化について

オーストラリアも日本ほどではありませんが少子高齢化が進んでいて、そのためトイレ、公共施設、店などは段差の少ないつくりになっています。さらに少子高齢化対策として、子供がいる世帯に2週間に1回程度、国からの手当が支給されているのだそうです。これは日本で言う子供手当のようなものだと思いますが、オーストラリアでは早いうちから、国が対策に力を入れていることがわかりました。

オーストラリアに比べ、日本の出生率がとても低いと聞いて、改めて日本の少子高齢化を実感しました。



IV お年寄りに少しでも快適に過ごしてもらうには・・・

私の住む南外地域では近所のほとんどの人がおじいさんやおばあさんのお年寄りです。南外中学校の今年度の生徒数も81人と、100人を切っています。また、地域に2つある小学校が来年度統合し、一つになることも決まっています。どんどん人が減り続けていることを本当に身近に感じています。



お年寄りに少しでも快適に過ごしてもらうにはどんなことが出来るのでしょうか。

もちろんバリアフリー化や福祉施設、医療機関の充実はなくてはならないことだと思います。でも今、私がお年寄りに対して出来ることは、手助けや声かけをすることだと思います。

また、オーストラリアでは信号の押しボタンの位置が低かったり、点字があったり、ボタンに振動が流れていたりするほか、盲導犬・介助犬の育成がさかんであったりと、色々な工夫がされていました。ですが、何よりもオーストラリアの人たちは皆フレンドリーで、初対面でも、子供もお年寄りも年齢を問わず思いやりにあふれ、ごく自然に笑顔で助け合いをしていることを強く感じました。日本にも工夫はたくさんあると思います。でも、日本とオーストラリアを比べてみると、やはり日本人たちはどこか遠慮がちで他人ごとのような部分もあるのではないかと思います。だから私は、近所のお年寄りに積極的に声をかけて会話をしたり、歩いているとき足や腰がつかうらそうだったら手伝ってあげたりなど、オーストラリアの人たちのように他人を思いやる心をもって接していきたいと思っています。それがお年寄りに少しでも快適に過ごしてもらうための第一歩だと思うからです。

また、いつもお世話になっているたった一人の祖父のことも気遣っていきたいです。



V ～思い出の1ページ～ in Australia

〔初めてのファームステイ！〕

私は、キャサリンさんとダンカンさんのお宅にファームステイさせていただきました。

キャサリンさんは優しく、私たちのことを色々と気遣ってくれました。ガーデニングの手伝いをしたり、一緒に食事の準備をしたりしました。また、国立公園やショッピングに連れて行ってもらったりと、忘れられない思い出がたくさん出来ました。





ダンカンさんは音楽が大好きで、夕食後によく音楽を聴いていました。日本では考えられないほどの大音量で、近所に迷惑がかかりそうなほどでしたが、ファームは本当に広いので平気なのだと思います。とても面白い方で、一緒にダーツをしたりしました。

ファームは広くて、日本には無い光景に驚きました。牛や馬、ロバ、アルパカがいて、プールやテニスコートまであって、驚きの連続でした。

ファームステイで一番思い出深いのは、2回も連れて行ってもらった shopping です。行き帰りの車の中はみんな疲れてすっかり眠り込んでしまいましたが、さまざまなお店をまわってキャサリンさんと買い物をするのは楽しかったです。最初はオーストラリアドルの使い方がよくわかりませんが、すぐに慣れ、日本ではあまり見かけない商品に胸が弾みっぱなしでした。

英語で話すのは最初のうち緊張しましたが、ホストファミリーがやさしく温かく聞き取ろうとしてくれたので、だんだん英語を話すのが楽しくなりました。日本の文化や言葉を教えたり、オーストラリアの文化を教わったり、たくさん学ぶことが出来ました。素敵なファームステイになりました。

キャサリン&ダンカン, thank you very much!



〔ドキドキの自由時間！〕

滞在最終日の夕方からゴールドコーストの街を自由に散策しました。夕食は友達と一緒にピザを買って食べ、日本語を話す店員さんのいるお土産店に行きました。かわいいお土産がたくさんあったし、日本とかかわりのあるお店だったので、安心してたくさんお土産を買うことが出来ました。デザートにフラッペも飲み、自由時間を満喫しました。ホテル周辺での行動でしたが、十分に楽しみました。



VI 海外研修を終えて ～まとめ～

オーストラリア研修に参加して、他校の友達や慣れない生活環境、英語での会話に不安もありましたが、初体験がたくさん、充実した7日間でした。

ファームステイの初日、私は迎えの車の中にパーカーを忘れてしまいました。英語でわけを話して取りに行ったときが、ここが日本ではないということを実感した最初の瞬間だったと思います。日本語だったら簡単なのになあとも思いましたが、英語を話すのは楽しいことでした。

今までは、いつ、どこで使うことになるのかも分からずに学習してきた英語。オーストラリアの海外派遣生として決まったとき、生きた英語に触れることが出来るという喜びでいっぱいでした。そして、今まで英語をちゃんと勉強してきた良かったと心から思いました。

しかし、今回オーストラリアで一番強く感じたのは、もどかしさです。自分の話す英語はなんとか伝わっても、相手の話す英語が聞き取れなかったりよくわからなかったりして、もどかしく悔しい思いをしました。

そんなときは大変でしたが、ジェスチャーで理解できたことが何度もありました。相手がいやな顔ひとつせず、がんばって伝えようとしてくれたこともうれしかったです。逆に、日本に帰ってきて、もうあの生きた英語に触れることが出来なくなってしまったと思うと、少し寂しくて残念でした。

今回の研修を通して、より英語が好きになりました。これからさらに英語を勉強したいです。そしていつかまたオーストラリアに行って、自分の英語力がどれくらい成長したのか試したいと思います！

今回オーストラリアに行くことが出来て本当によかったと感じています。数え切れないくらいたくさん学んで、たくさん思い出を作ることができました。送り出してくれた家族やお世話になった皆さんに、心から感謝しています。

Australia is very warm and beautiful country.

I had a good time!!



オーストラリアの人々の話し方

No. 18 中仙中学校 九嶋朱星

I はじめに

ずっと心待ちにしていたオーストラリア研修。社会科で学習したオーストラリアは、比較的温暖な気候で暮らしやすい場所であるという印象で、暖かいところが好きな私にとっては、ずっと行ってみたい国の一つになっていました。しかし、異国の地での研修、生活には、正直不安を感じていました。

II テーマ設定の理由

私は今回、「相手に伝わりやすいように話すにはどうすべきか？」というテーマを設定しました。あまり英語を話せない私にとって、相手に伝わりやすいように話すことは大きな課題となります。英語を勉強することはもちろん大切だと思いますが、それ以上に、まず相手に伝えようという意志がなければ伝えることはできません。私は、将来保育士を目指しています。一年生のときの職場体験で、保育園では日本語を話し、家では英語で話すというハーフの園児に出会いました。その時、英語も話せる保育士だったら、園児にとってどんなにいいだろうと思いました。そして、生きている英語に触れたいと思うようになりました。また、日本人は、自分の思いを相手に積極的に伝えようとする国民性ではありません。そこで考えたのがこのテーマです。このテーマについて学ぶことによって、少しでも成長できればと思います。

III 調べた内容

〈オーストラリアの人々の国民性〉

事前学習で、オーストラリアは多民族国家だということを知りました。多くの言語が使われているので、違う言語を話す人とも会話をする力があるのではないかと考え、国民性に注目して調べることにしました。



私のグループは、ロレインさんとマイケルさんのお宅にファームステイさせていただきました。ホストマザーのロレインさんにお話を伺うと、予想通り、オーストラリアは多言語の国なので、初対面の相手などと会話をするのが上手であるとの話でした。

中学校にしても、オーストラリアでは、様々な国、人種、宗教、言語の人々がいます。そんな場合、日本人はどうするのでしょうか。おそらく、同じ日本人同士で話すことが自然に多くなるでしょう。しかし、オーストラリアの人々は、違う国の人同士でもお互いに文化を理解し合い、認め合い、生活しているのです。私が実際に体験した四つの事例を紹介します。

オージーキッズとの交流会でこんなことがありました。私たちと同じ年の14歳の女の子三人組が、仲よさそうに会話をしていました。その時、あることに気がつきました。三人のうちの一人が、肌の色が違うのです。彼女は英語を話していましたが、人種が異なっても、お互いのことを認め合っているからこんなにも仲がいいのだなと思いました。

二つ目は、レストランで夕食をとっていた時のことです。キッチンにいたシェフに、私は「ローストビーフを三枚ください。」とお願いしました。日本では、外国人に話しかけられた時、少しとまどいを見せたり、上手く会話できるか不安そうにしたりする人が多いと思います。しかし、そのシェフは全くそのような表情は見せずに、「いいですよ。」と笑顔で答えてくれました。

三つ目は、私たちがホテル近くの海に遊泳にでかけた時のことです。海に入って遊んで

いと、女の子の二人組が近づいてきました。最初は自分が話しかけられていることにびっくりしましたが、彼女たちは、絶えず笑顔で話してくれました。私たちよりも2歳年上の彼女たちでしたが、積極的に初対面の人たちと話す彼女たちを、自分も見習わなければならないと思いました。

四つ目は、マッドクラブの仕掛けを引き上げにいくために、船に乗った時のことでした。近くで遊泳している人たちが、私たちに手を振ってくれたり、気軽にあいさつをしてくれました。近所の場合は別としても、道で会った人に話しかけることなど、日本ではほとんど考えられないのですが、オーストラリアでは当たり前のことなのです。

このように、オーストラリアの人々は初対面の相手とでも会話をするのが得意であり、慣れているということ、身をもって感じました。



〈相手に伝わるように話すコツ〉

このことについて、ホストマザーのロレインさんに質問してみました。そして、全部で五つのコツを知ることができました。

①あいづち

これは、私でも思いつくようなことであり、とても簡単に思えますが、実はとても大切なことでした。ロレインさんは私が話しかけると、料理をしていても洗濯をしていても、必ず手を止めて目を見て話を聞いてくれます。もちろんそれは、私があまり英語を話せず、伝わりにくいということがあるからだと思います。ロレインさんは、聞きながら何度も何度もあいづちを打ってくれました。あいづちを打つことで、話が伝わるようになるわけではありません。しかし、相手が真剣に聞いてくれているということが分かり、話している方は「もっと伝わりやすく話すことはできないかな」ということを考え、伝えようという思いがより強くなるのです。

②ボディランゲージ

これは、日本人が特に苦手なことの一つです。オーストラリアの人々は、「箱に入っている」という簡単な会話でも、自分の手で箱の四角い形をつくって表そうとします。私にも、「箱に入っている」という英語は分かります。しかし、その簡単な会話に使うボディランゲージこそ、よりよい意思疎通のためには大切なことなのです。もちろん、相手に説明しにくいことを話す時も、ボディランゲージは役に立ちます。

③相手の名前を呼ぶ

これは、意識すれば容易にできることだと思いましたが、オーストラリアの人々は使い方が違いました。ロレインさんは、夫のマイケルさんのことを「お父さん」ではなく、「マイケル」と名前と呼んでいたのです。私の家では、母が父のことを「お父さん」と呼んでいるので、「マイケル」という呼び方を不思議に思いました。なぜ名前と呼ぶのかと聞いたところ、そう呼ぶことこそがポイントなのだそうです。お父さんという存在は世の中にたくさんいますが、マイケルさんという存在はこの世に一人しかいません。そこで特別感が生まれるというのです。それによって、相手は「自分に話しかけてくれている」ということに気づき、少しでも相手のことを理解しようという気持ちが生まれるというのです。それに対して、日本の場合は、子どもの立場になって家族全員を呼んでいることにも気づかされました。

また、相手に伝わるように話すコツとはあまり関係のないことかもしれませんが、オーストラリアには丁寧な言い方はあっても、敬語がないので、ロレインさんにはニックネームで「『ローリー』と呼んで」と言われました。「ローリー」と呼ぶのには少し違和感があったので、そのことについてもなぜニックネームで呼ぶのかと聞いてみました。相手との距離を縮めるためだと、ロレインさんは話してくれました。相手との距離を縮めることで、短い時間でその人と仲よくなれることを知りました。異国の文化ならではのことであったと思います。

④あいさつ

これは、「オーストラリアの国民性」でも述べましたが、オーストラリアの人々は、道ばたで会った人にも気軽にあいさつをしてくれます。それは、そこから会話が発展しやすいようにということだそうです。まず「Hello!」から始まり、相手から返事が返ってきたら、今度はすぐに「How are you?」と聞いてくれます。オーストラリアでは何気ないことなのですが、私にとってそれは新鮮で、心地よいものでした。学校や地域や訪問先で会う方々にあいさつはしますが、「お元気ですか?」と相手の調子を気遣う言葉はかけたことがないので、これからは、そのように声をかけてみたいと思いました。

⑤マイペース

これは、一見会話のコツとは関係がないように思えます。しかし、実はこれも重要なことでした。初対面の人や言語が違う人と話す時は、相手に伝わるように話そうと焦ってしまいがちですが、マイペースこそが相手に伝わりやすい方法なのだというのです。確かに、自分のペースで話すと落ちつくことができ、伝えたいことだけ伝えることができます。一概には言えませんが、オーストラリアの人々は広大な土地に暮らしているという影響からか、非常にマイペースです。歩くのも東京のサラリーマンとは違いゆっくりしているし、朝起きるのもあまり早くありません。自分を尊重し、相手も尊重するという方法で会話をしているようです。

このように、意識すれば簡単にできることを当たり前のようにしていくことこそが、相手に伝わるように話すコツなのです。私たち日本人も、もっと積極的に話しかけたり、あいさつしたりするべきだと思います。いくつもある言葉を自由自在に操り、相手と意思を疎通させることができるのは、人間ならではのことで、だからこそ、相手のことを思い、それを態度に表し、言葉として発し、行動していきたいと思います。

また、このテーマについて調べたのがきっかけで、日本ならではの「話をするきっかけ」となるものの存在を再認識できました。それは、お辞儀です。日本人は、相手に敬意や誠意を表すためにお辞儀をします。それは時として、「今から私が話しますので聞いていただけませんか?」という意思の表れともなり、それによって、相手も話を聞こうとしてくれるのです。礼儀としてのお辞儀だけでなく、意思を表すものとしてのお辞儀の意味も大切に、活かしていきたいと思います。



IV エピソード

1 驚きの連続！オーストラリア

オーストラリアに着いた瞬間から、驚くことばかりでした。飛行機から降りて、まず暑いと感じました。気温を聞いてみると 35 度もあり、やはり夏なのだと感じました。しかし、オーストラリアの人々はサングラスをし、コマメに水分補給をして、暑さの中でも元気に生活していました。

ファームステイのお宅の中でも、初めて見るもの、知るものばかりでした。家にピザ用のオープンやバーベキュー専用のグリルがあり、私には夢の世界でした。初日は、とにかく目を輝かせたり、丸くしたりするという一日になりました。

一番驚いたのが、家の壁にヤモリが、しかも三匹もはりついていたことです。生き物があまり得意ではない私は、怖くなってすぐにロレインさん呼びました。「Help me! This is Gecko!」と何度も叫びました。巨大なカエルにも驚きましたが、やがて生き物を見てあまり驚かなくなりました。同じ世界でありながら、ところ違えばこんなにも体験できることが違うものなのだなどと改めて感じました。

また、オーストラリアの子どもたちは、すごく大人びているように見えました。同じ年でも身長 170 センチはとうに超えていて、スタイルもよく、ファッションもカッコよかったです。それとは逆に、日本の子どもたちはすごく無邪気だと思いました。例えば、遊ぼうとなったらみんなで走り回るし、元気に遊びます。世界中の子どもたちは、みんな同じように無邪気に遊ぶと思っていたので、その違いを感じました。



食文化も日本とは全く異なっていました。ある日、食事と一緒に出てきたフルーツジュースの容器に驚きました。日本ならペットボトルが一般的ですが、オーストラリアでは、日本の衣料用柔軟剤の容器にそっくりでした。スーパーで売られている物は、日本で小さいものが大きく、大きいものが小さかったりして、興味深く思いました。ジュースの容器が気に入ったので、ホストマザーにお願いして日本に持ち帰ってきました。

2 きれいな自然に囲まれたオーストラリア

オーストラリアで、きれいな山、海、空に出会うことができました。あんなに真っ青な海を見たり、高い波に乗ったりしたのは初めてだったので、感動の連続でした。山も世界自然遺産に登録されていて、大事に守られていました。

一番大変だったのが、鳥への餌付けでした。エサを持ってお店を出た瞬間、大きい鳥が前をバァーッと横切り、怖くて動けなくなってしまいました。それでも、最後にはなんとか鳥にエサをあげることができました。貴重な体験でした。

また、コアラを抱いたことも印象に残っています。コアラは思った以上に重くて、爪の力も強かったのですが、すごくフカフカで温かでした。



V もう一つのオーストラリア

今回私が調べたのは、会話というテーマでしたが、この研修でオーストラリアの自然環境にも興味をもちました。オーストラリアは水不足で有名で、そのためシャワー時間がとても短いと言われています。私たちのファームステイしたお宅は、巨大な貯水タンクをいくつも持っていて、それほど水には困りませんでした。それでもホストマザーは、食器を洗う時にあまり水を使わないように工夫していました。さらに、水がジュースよりも高いことを知って、本当に水を大事にしている国だということが分かりました。

ホストマザーの案内で、家の敷地から少し離れたところでカンガルーの群れを見ました。まさか、家の近所にカンガルーがいるとは思ってもみませんでした。カンガルーは群れで行動していました。ジャンプ力に富んでいて、うらやましく感じました。

大自然に囲まれて暮らしているオーストラリアの人々は、自然と動物と共存して暮らすという考え方を日頃からもっているのだと思いました。自分たち人間のことだけではなく、一緒に生きている動物のことも考えていくということが、オーストラリアにしかない珍しい動物が未だに絶滅していない理由であると思います。私もふだんから、周りの生態系を崩さないように、気を配っていきたいと思います。

VI 海外研修を終えて

今回の海外研修で、日本では体験できないことをたくさん体験できました。環境も違う、言葉も違う、全てが違う中で、たくさんの人の優しさに触れることもできました。そして、ふだんの生活がいかに幸せかということを実感しました。初対面であっても、笑顔で接してくれた現地の方々、そして、一緒に海外研修に参加した仲間や、お世話になった教育委

員会の皆様はじめ多くの方々に、感謝の思いでいっぱいです。

今回の研修の成果を、これからの学習や生活に活かしていきたいと思います。特に、自分なりの答えを見つけることができた研修のテーマ「相手に伝わるように話すコツ」は、英語の授業やいろいろな場面で、友達と共有していきたいと考えています。



日本を離れることで、日本のよさにもたくさん気づくことができました。それをいつも心にとめて生活していきたいと思います。何より、もっともっと英語を学ぼうという意欲がわいてきました。もっと英語ができたらあれを話せた、これを話せたと残念な思いをしたので、今度英語で話す時に後悔しないよう、日頃から授業をしっかり受け、会話力向上に向けて勉強に励んでいきたいと思います。将来、英語だけでなく他の言語も話せるようになって、様々な人々や文化と触れ合い、より多くの体験ができるように、英語や外国語と付き合っていきたいと思います。

オーストラリアで学んだこと

～野生動物と人が共存するにはどうしたらいいか～

NO.19 大仙市立豊成中学校 井上 大和

1 はじめに

1月3日から1月10日までの1週間、私は大仙市の海外派遣事業に参加してオーストラリアにファームステイしてきました。

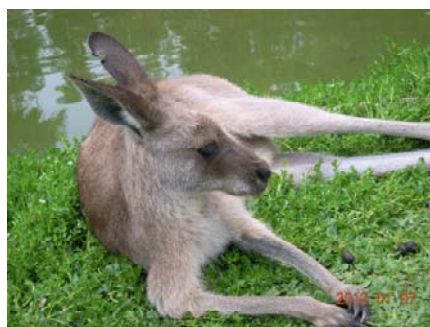
私がこの研修に参加した理由は、現在の自分の世界観が、自分の住む地域、大仙市、そして限られた秋田県内での生活だけからしか成り立っていないのではないかと思ったことからでした。将来は広い社会の中の、知らない組織の中で生活していかなければなりません。そうしたとき自分の世界観が狭いとなかなか活躍できないと思います。広い視野で社会を見て行けるようになるためにも、今回は良いチャンスだと思いました。

2 テーマについて

(1) テーマ設定の理由

私の研修テーマは、「野生動物と人が共存するにはどうしたらいいか？」というものです。

日本では毎年秋に野生動物によって人が襲われたり、畑が荒らされたりする被害が起こっています。近頃、山を切り開いて高速道路、住宅地、施設などをつくっているため、野生動物の住みかが無くなり人里におりてくることが増えました。そして、年々被害が増えているような気がします。私の住む地域は自然が豊かで、野生動物も多く生息していて、これらの被害とも無縁なわけではありません。



【カンガルー】

オーストラリアには貴重な生き物がたくさんいることから、野生動物に対する対策が整備されているのではないかと思いました。それらを参考にして、どうしたら自然を壊さず、野生動物と共存して安全に暮らすことが出来るのか考えたいと思い、このテーマを設定しました。

(2) 野生動物と人が共存するためのヒント

①自然との関わり

私がファームステイしたアギュノレット家では、アルパカ、らくだ、クジャク、馬、10種類ほどの鳥、川鶺かわう、ラマ、イグアナを飼っていて、周りが動物であふれていました。これほど多くの動物を飼っているのは日本では考えられませんが、オーストラリアではそれほど特別なことではないようです。一番近くの家とも10キロメートル以上離れてい

るので、問題があった時は自分たちだけで解決しなくては
はいけません。そのため自然や動物に対する知識も豊富
です。私は、ファームスティ2日目、ホストファザーの
ピーターさんと2時間ほど山を散策しました。ピーター
さんの案内で、珍しい植物やロックカンガルーという岩
場に生息する貴重な動物も見ることができました。2時
間も山を歩くと距離は6キロメートル以上にもなります
が、私には、周りの風景も植物も、どこまで行っても同
じように見えました。日本では近くの山の生き物や地形などについて、一般の住人はほ
とんど知りません。オーストラリアの人たちは自分たちの周りの自然に関心をもち、自
然から多くの知識を得ていると感じました。



【ロックカンガルー】

②動物との接し方

現地でお世話になった日本人ガイドさんの話では、オーストラリアの法律で人に危害
を加えた動物はペットであっても処分しなければならないというものがあるそうです。
そのため、人々は動物との接し方にしっかりと気を配るそうです。ペットを飼うとい
うことは大きな責任を持たなくてはいけないことだと意識しているところが、日本とは大
きく違うと思います。私のファームスティしたアグノレット家でも動物との接し方がて
いねいでした。これは、接し方がよく分かっているのだと思いました。普段から動物に
囲まれて暮らしていればこうなるのかもしれませんが、動物に対するしっかりとした知
識が根底にあるのだと感じました。日本人は動物に対しての知識が浅いと思います。オ
ーストラリアの人たちのように、周りの自然にもっと関心をもって暮らせば、動物に正し
い接し方ができるのではないかと思います。

(3) テーマについて分かったこと

動物と人が共存するには、人が自然や動物の事をもっと知らなくてははいけないと思
います。オーストラリアの人に比べ日本人はそうした知識が乏しいと思います。日本でも、
被害が起きてから動物を処分するのではなく、被害が起きないように山に入る道に事前
に柵や有刺鉄線を設けたり、野生動物がよく出る場所には注意を促す看板を立てるなど、
対策が必要だと思います。また、多くの方が、野生動物に対する知識や接し方を知るこ
とが、野生動物が人を襲うという事件を減らす第一歩になると思います。

3 ファームスティについて

(1) ファームスティでの体験

◆1月4日(火)

成田空港から8時間、オーストラリア第3の都市、クイーンズランド州ゴールドコー
ストに到着しました。オーストラリアの空港は日本の空港と違って、町のど真ん中であつ
てびっくりしました。空港には日本人観光客らしい人もたくさんいました。その後バス
で州内のボーデザート地区に移動しました。クイーンズランド州は日本の5倍ほどの大

きさなので、同じ州といってもゴールドコーストからボーデザートまでは何百キロもあります。バスに乗って高速道路を通り約1時間、ボーデザートに着き、いよいよホストファミリーとの対面です。どんな人なんだろうと、とても緊張しました。私たちのホストファミリーはアグノレット・ピーターさんと妻のディスリーさんです。

◆1月5日(水)

ファームステイ2日目です。昨日はとてもよく眠れました。今日は朝から貴重な野生動物を見に山を散策しました。山の中には見たことのない植物がたくさん生えていて、まるで違う世界のような感じでした。しばらく歩くと岩山に登る事になりました。歩くというよりはよじ登るといって感じで、私にとってはかなりきついものですが、登ったかいがあって、「ロックカンガルー」という岩山に住む珍しいカンガルーの仲間を見ることができました。

家に帰った後は家畜の世話をしました。この家の家畜はアルパカ約20頭、馬1頭、ラマ2頭でした。私たちは草刈りの手伝いやアルパカの毛を集めたりしました。アルパカは普段おとなしくて、見た目はかわいいのですが、だまされてはいけません。近づくと唾を吐いてくるし、私を見つけると走って追いかけてきて、ジャンピングキックをくらわせたりします。おかげで、仕事はびくびくしながらやらなければいけないし、私はアルパカに敵だと思われているらしく、ファームステイしている間、ずっと狙われることになりました。

夜はピーターさんの友人の家族がきて、一緒にピザを食べました。ピーターさんはピザのレストランを営んでいたこともあり、この日のピザは今まで食べたピザと比べものにならないくらいおいしかったです。そして私たちもピザの作り方を習い一緒に作りました。形は悪かったのですが、みんな喜んで食べてくれました。ピーターさんの友人の家族は日本に住んでいたこともあって、日本語も少し話せて、とても話がはずみました。この日は疲れましたが、こういう毎日を送っているピーターさんとディスリーさんはすばらしい日々を過ごしていると思いました。オーストラリア人の元気さ、明るさ、タフさを学んだ一日でした。



とてもおもしろくて頼れるピーターさん。強い男をめざして、毎日5杯のコーヒーは欠かせない。イタリア生まれ、オーストラリア育ちのパワフルな73歳。



【アルパカ】

◆1月6日(木)

ファームスティ最終日です。今日はあいにくの雨模様でした。外で仕事もできないので、午前中は、ピーターさんのお気に入りだという日本の映画、「座頭市」、「紅の豚」、「となりのトトロ」のDVDを見ました。その後、昼食のパスタをディスリーさんに習って作りました。パスタの作り方は簡単で、特製の機械を使ってだんだん薄くして、均等な大きさに切れば、完成です。茹で上がったパスタはとてもおいしくてピーターさんも「very good」とほめてくれました。



◆1月7日(金)

今日の朝でピーターさんディスリーさんとお別れです。とてもなごり惜しく、寂しいです。ピーターさん、ディスリーさん三日間本当にありがとうございました。お二人のことは一生忘れません。いつまでもお元気でいてください。

(2) ファームスティで学んだこと

私が今回のファームスティで学んだことは、コミュニケーションの大切さです。

ファームスティ中にホストファミリーと会話をするとき、言い表し方が分からなくて知っている単語を出して伝えようとしてしました。そしてホストファミリーも何とか理解しようとしてくれました。もしもこのときに、なにも言うことが出来ずにいたら相手が困ってしまうし、自分も心が開けず、寂しい思いをしていたと思います。自分の殻に閉じこもらず、不安な気持ちから一歩踏み出して、何とか言葉を出して伝えようとする事が大切だと思います。まず自分から思いや考えを発信していくというふうに自分を変えれば、例えば生徒会でも周りをひっぱっていけるし、周りの人も変えることができるはずです。ファームスティで学んだことは、私を人間として大きくしてくれたと思います。そしてそれはこれからの自分をもっと成長させるための糧となるはずです。この思いを忘れず、海外研修で学んだことを生かして将来のためにがんばっていきたいです。

最後に、この実りある海外研修に私を送り出してくれた家族、先生方、そして大仙市教育委員会の方々、本当にありがとうございました。

研修のテーマ

「野生動物と人が共存するには

どうしたらよいのか？」

No. 20 豊成中学校 山崎真太郎

1 はじめに

僕がオーストラリアの研修に参加しようと思ったのは、昨年度、韓国の中学生在が自宅にホームステイをしたことがきっかけでした。韓国の中学生キムさんと二人で犬の散歩をしたときは、言葉ではうまく伝えられなかったけれども、やりたいことや気持ちをお互いに分かり合えて、とてもうれしかったです。キムさんはカナダでもホームステイを体験していて、自国とカナダと日本の生活の良さをわかっているようで、僕よりもいろんなことを知っていました。そんなことから、僕は、海外の文化に興味を持ち、海外に行って異なる文化を学んできたいという気持ちから、今回のオーストラリア研修に参加しようと決めました。

2 テーマについて

僕の研修テーマは、「野生動物と共存するにはどうしたらよいのか？」です。このテーマにした理由は、最近の大仙市内への野生動物の出没がきっかけです。例えば、熊は市内に出没しては、人々に嫌われる行動をしています。そのような動物と共存するには、どうしたらよいかを考えてみたいと思いました。僕がテレビや本で知る限り、オーストラリアでもカンガルーが道路に出没して交通の邪魔をしているようですが、オーストラリアの人々は、カンガルーをそんなに嫌っていないように見えるのはなぜだろうと思いました。どうしたら共存できるのか、オーストラリアの現状を参考にしながら、今後について考えていきたいと思いました。

3 調べた内容

オーストラリア以外ではほとんど見られない、有袋類のカンガルーや、コアラに会うことができました。オーストラリアの魅力ある自然がどのように維持され、人々と動物がどのように共存しているのか調べてみました。

(1) 現地の動物について

①コアラ

オーストラリアを代表する動物としてとても有名なコアラ。ゆっくりとして愛らしい夜行性の動物です。コアラは、アボリジニの言葉で「水を飲まない」という意味だということを知りました。1日に18～20時間寝ています。生で見ると、とてもかわいいです。動物園では、コアラをだっこして写真を撮ることができました。有料でしたが、そのお金はコアラの保護に使われているそうです。



②カンガルー

お腹に袋がある、オーストラリアでコアラと並ぶくらい有名な動物。中型種をワラルー、小型種をワラビーと呼びます。

ワラビーはかわいらしく、カンガルーは迫力がありません。右の写真は、自然公園を散策していたときに、森からワラビーが飛び出してきたところを撮ったものです。



③クロコダイル

どう猛な印象のあるワニ。オーストラリアにはイリエワニと淡水ワニの2種類が棲息していますが、淡水ワニはおとなしいそうです。僕たちが訪れた動物園内では、ワニの子どもが道を横断していたのでびっくりしました。



④アルパカ

誰でも一度は、名前を聞いたことがあると思われるアルパカ。見た目も、手ざわりも、ふわふわでした。とてもかわいかったです。



(2) 現地の人が動物に対しどのようなことをしているのか

現地では、カンガルーは野生そのままの生活をしているようでした。人は、そのカンガルーの住む森に公園を作り、カンガルーとの交流を深めようとしているのではないかと思います。さらに動物園では、カンガルーだけでなく、クロコダイルの子どもも放し飼いにしていました。これも動物との交流を深めるためにしているのではないかと思います。これらのことから、現地の人は子どもたちに、野生動物との交流を深め、将来これらの動物を大事にしてほしいと考えているのではないかと思います。ホストマザーが、「動物はフレンドリーだ」と言っていたのが印象的です。

交通標識にも動物注意を表すいろいろなものがありました。オーストラリア人は、道路に動物が現れたとき、車を止めて動物が行き過ぎるのを待っています。これで、道路を横断する動物はほぼ安全だということになります。日本にも動物注意の標識がありますが、本当に出会ったらどのように対処したらいいのか不安に思う人が多いのではないかと思います。

また、空港の税関では、食料などの持ち物を厳重に調べていて、オーストラリアに食品類を持ちこむには、特別な申請が必要ということでした。僕たちは、ホストファミリーに稲庭うどんを味わってもらおうと材料を準備して行ったので、申請して許可してもらいました。

調べてみると、オーストラリアでは、以前に虫の駆除のために大量のカエルを導入したそうですが、初めのうちは、人々によく思われていたカエルがそのうち大繁殖して生き物の生態系がくずれ、人々から煙たがれる存在となっていく、そのうちカエル狩りまで行われるようになってきたそうです。

このようなことから、国外から生き物を入れないことで、オーストラリアの生態系



を守っているのではないかと思いました。生態系は絶妙なというか、微妙なバランスで保たれており、ちょっとした変化でも簡単にバランスがくずれ、自然界全体に、そして人間の生活にも大きく影響を与えることがわかりました。(参考：平成 21・22 年度大仙市中学校生徒海外派遣事業「オーストラリア研修報告書」)

(3) オーストラリアの環境保護

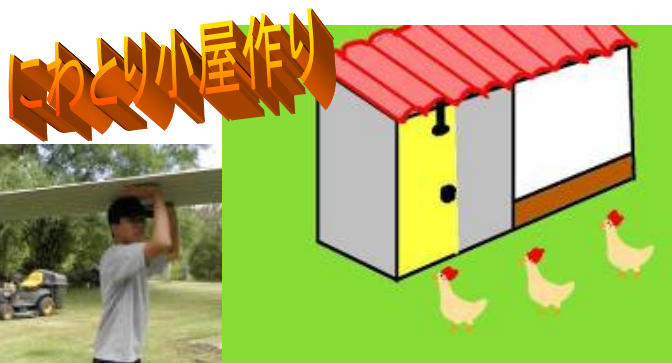
僕は、どうしてオーストラリアの人々が野生動物を大事にするようになったかを調べてみることにしました。「オーストラリア発見～自然・動植物・環境～美しい自然をどのように守っているの?～」(<http://discover.australia.or.jp/index.html>、豪日交流基金中学生向けウェブサイト)には、オーストラリアでは、「できるだけ多くの動植物を保存することは自然環境の維持のためだけではなく、将来の人間のためでもある」と考え、「多数の自然環境プログラムを通じて、地域社会の環境問題に関する住民の意識を高め積極的に環境を保護する姿勢を養おうとする努力がなされています」と書かれています。たとえば、「セイブ・ザ・ブッシュ」というプログラムでは、多様な生態系を維持するための地域活動を促進し、資金援助を行っているそうです。子どもたちのためにもたくさんの環境プログラムが設けられていて、多くの学校で積極的に環境教育が行われていることがわかりました。僕のテーマとは違いますが、オーストラリアの学校でもアルミ缶のリサイクルをしていて、「オーストラリアは、アルミ缶のリサイクルが世界で最も盛んな国です」ということが書かれていました。ボーキサイトの産出国オーストラリアで、自国の資源を大切にしていることを知って、「さすがだな！見習わなければいけないな！」と思いました。

4 エピソード

(1) ファームステイ

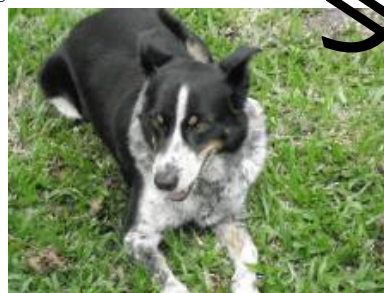
[にわとり小屋作り]

一緒にファームステイをした仲間と、ホストファザーと一緒ににわとり小屋を作りました。3日かけて作ったので、出来たときはとても満足感がありました。疲れたけれど貴重な体験が出来てよかったです。



[ホストファミリーの愛犬テラ]

ファームステイの初日から3人の男子になつた犬のテラ。テラが大好きなサッカーボールをけったり、投げたりして一緒に遊びました。サッカーボールを遠くに飛ばすと、ヘディングやキャッチをします。人が近寄ると、「もう1回!」と要求するようなそぶりを見せます。利口な犬で、ホストファミリーのいうことは何でも聞いて、それに従っていました。家族と信頼し合っていることがわかりました。



[食べ物]

オーストラリアの食事で最初に感じたことは量の多さです。僕はかなり少食なので、初日、食後はお腹がいっぱいになりました。日本人は霜降り肉などのやわらかい肉を好みますが、オーストラリアの人々は、かめばかむほど味が出るということからかたい肉を好むので、僕はかみ切るのに時間がかかりました。かなりこってりした味でしたが、香ばしくてとてもおいしかったです。

(2) 観光 森・山・海・町

[鳥のえさやり]

オリリーズゲストハウス（グリーンマウンテン）の売店で鳥のえさを受けとり、七面鳥などにあげようと売店から外に出た瞬間、鳥がえさ入れに向かって飛んできてあせりました。しかし小鳥がえさを食べているところを見ると、気持ちがなごみました。



[グリーンマウンテン]

グリーンマウンテンというのは、世界自然遺産の一つで、世界最大の亜熱帯雨林です。この森は、歩いて散歩することができます。森の中に、年をとって木の中身が無くなってしまった、中が空洞のイチジクの木がありました。大昔から生きている木だそうです。観察用に作られた長いつり橋を歩きながら、この亜熱帯雨林を眺めて楽しむことも出来ました。自然をいろいろな視点から楽しめるように工夫されていて、楽しく過ごすことができました。



[エビつり・船上つり]

船上で魚つりをするために、無人島でエサのエビを吸い上げパイプで捕りました。このエビはシャコの仲間だそうです。さわった感じはとてもやわらかかったです。エビは大漁だったのに、船上つりでは魚が一匹もつれなかったのが残念でした。しかし、前日に仕込んでおいたかごに蟹が一匹かかっていたので、それをつり上げることができたのでうれしかったです。

[ホテル周辺自由行動]

オーストラリアでの最終日の夕方、男子5人でゴールドコーストの街を散策しました。夕飯は、日本の味が恋しくなり博多ラーメンを食べました。それまでは毎日牛肉料理だったので、よりおいしく感じられました。僕はやはり日本食が一番だと思いました。ラーメンを食べ終わった後、土産店で友達へのお土産と自分用に、逆コアラのTシャツを買いました。その店には日本人の店員がいたので苦労せずに買い物できました。

5 まとめ

僕はオーストラリアで、日本ではできない体験から様々なことを学び、人々は動物達とどのように関わっているかを学んできました。オーストラリアの人々は、動物の生態系を大事にしていると思いました。

動物への注意を促す標識をよく高速道路で目にしました。たくさんの動物が人間といっしょに住んでいると感じました。日本でも似た標識を見かけます。人間も動物も安全に暮らすための配慮だと思います。しかし、大仙市には、オーストラリアのような野生動物を放し飼いにしている公園どころか、動物園等もありません。身近にそのような動物と出会う機会がないので、突然出会ったときは怖くなると思いました。そのような状況では、熊やイノシシを敵視してしまうのではないかと思います。

またオーストラリア人のように、ゆったりのんびりした国民性も生態系のバランスをとるのにプラスになっているのだろうかと考えました。オーストラリアの人々は、野生動物にとっても「フレンドリー」でした。日本の熊やイノシシもフレンドリーに見たり、いいところを探したりすると、野生動物のよさに気づくことができるかもしれません。そうすることで、共存へつながっていくのではないかと思います。英和辞典で“friendly”の意味を調べてみると、「友人のような、親しい、友好的な」と書かれています。野生動物に対して「フレンドリー」に接することが自然にできるようになるためには、身近な地域に野生動物がいて、子どもの頃から友好的に接することが大事になってくると思います。僕は東山の辺りに自然公園を作って、そこで安心して自然を楽しむ環境を整備したらどうだろうと考えました。

大仙市では、「熊に襲われた」というニュースも聞きます。豊成中学校でも、「近くに熊が出たので下校時に注意するように」と言われたことがあります。僕も熊に襲われると怖いです。でも、熊は食べ物がないから里に下りてくるそうなので、熊が食べる木の実が十分に育つように森の自然を保護することが、まず一番にしなければならないことだと思います。

この研修が終わって、オーストラリアで学んできた様々なことを周りの人たちへ伝え、文化の輪を広げていきたいと考えています。



大仙市教育委員会